杉並区次世代育成基金活用事業

令和7年度

杉並区中学生海外留学 第13期

成果報告書

杉並区教育委員会

挨　　拶

教育長　渋谷　正宏

今年度も「杉並区中学生海外留学事業」に22名の中学生が参加し、オーストラリアでの貴重な経験を積んできました。派遣生は、日本とは異なる歴史と多様な文化が共生するオーストラリアでの生活を通じて、多くを学び、成長を遂げることができました。

そして、今年度も派遣生一人ひとりが自らの関心に基づいて研究テーマを設定し、現地での体験と調査を通じて得た成果を報告書にまとめました。オーストラリア・ウィロビー市に滞在する中で、派遣生は課題を解決するために、英語で街頭インタビューを行い、現地の人々から貴重な情報を収集しました。言葉の壁や文化の違いに戸惑いながらも、自分のテーマに真摯に向き合い、現地の声を聞き取ろうとする姿勢は、まさに「生きた学び」の実践でした。

また、現地校では現地の生徒と交流を深め、授業や学校生活をともに過ごす中で、教育環境や価値観の違いを感じることができました。また、ホームステイ先ではホストファミリーと生活を共にし、食事や会話、週末の外出などを通じて、文化や生活習慣の違いを体験しました。こうした日常の中での交流が、異文化理解の第一歩となり、他者を尊重する心を育んだことと思います。

さらに、ウィロビー市役所を訪問し、市長との交流の機会を得たことも、派遣生にとって大きな刺激となりました。自治体間の友好関係を実感し、国際社会の一員としての自覚をもつきっかけになったことでしょう。

今回の留学を通じて、派遣生は「ちがいを受け入れること」「他者を尊重すること」の大切さを、体験を通じて学びました。これは、杉並区教育ビジョン2022が掲げる「多様性を認め合い、共に生きる社会の実現」に通じるものであり、派遣生の姿はその理念を体現していると言えます。これからの人生においても、今回の学びを糧に、柔軟な心と確かな行動力をもって、自らの未来を切り拓いていってほしいと願っています。

最後に、この成果報告書は、派遣生の努力と成長の記録です。また、どの報告も主体的な学びと深い探究心に満ちており、読み手に多くの気付きを与えてくれる内容となっています。ぜひ、次世代育成基金に御寄附いただいた皆様、学校関係者の皆様、保護者の皆様、地域の皆様をはじめ、多くの方々に読んでいただき、生徒たちの学びの深さと可能性を感じていただければ幸いです。

結びになりますが、この事業を支えてくださった当基金に御寄附いただいた皆様、ウィロビー市の皆様、ホストファミリーの皆様、学校関係者、保護者の皆様に心より感謝申し上げます。皆様の御支援があってこそ、こうした貴重な学びの機会が実現しました。今後とも、生徒一人ひとりの成長を温かく見守り、支えていただけますようお願い申し上げます。

目　　次

◆杉並区教育委員会教育長挨拶……1

◆目　　次……2

◆思い出写真館……3

Ⅰ　海外留学の概要……12

Ⅱ　個人研究の報告……13

杉並区立阿佐ヶ谷中学校　第2学年　細　野　耕　生　「オーストラリアの学生のスポーツ環境について」……14
杉並区立東田中学校　第2学年　工　藤　珠　里　「オーストラリアに少子化問題はあるのか」……15
杉並区立東田中学校　第2学年　小　巻　優　梨　「オーストラリアの学校の外国から来た転校生への対応について」……16
杉並区立松溪中学校　第2学年　大　島　凛　音　「日本とオーストラリアの教育環境の違い」……17
杉並区立天沼中学校　第2学年　神　山　未柚子　「日本とオーストラリアの食文化の違い」……18
杉並区立天沼中学校　第2学年　渡　邉　梅　花　「日本とオーストラリアの食文化の違い」……19
杉並区立東原中学校　第2学年　五十嵐　高　澄　「日本とオーストラリアの食文化の違い」……20
杉並区立中瀬中学校　第2学年　松　岡　あさひ　「オーストラリアの多言語状況について」……21
杉並区立井草中学校　第2学年　山　本　光　音　「日本とオーストラリアの音楽観の違い」……22
杉並区立宮前中学校　第2学年　木　村　太　洋　「日豪の移民政策の比較から学ぶ日本の未来」……23
杉並区立富士見丘中学校　第2学年　山　口　琴　音　「日本とオーストラリアの野生動物への意識の違いについて」……24
杉並区立高井戸中学校　第2学年　赤　井　琉　果　「日本とオーストラリアのテニスに対する意識差」……25
杉並区立高井戸中学校　第2学年　岩　田　　謡　「日常と音楽」……26
杉並区立向陽中学校　第3学年　前　澤　理　公　「日本とオーストラリアの教育の違いに関する比較研究」……27
杉並区立向陽中学校　第2学年　吉　澤　　葵　「多文化共生を実現させるにはどうすればよいのか」……28
杉並区立泉南中学校　第2学年　大　矢　沙　和　「放課後の過ごし方の違いについて」……29
杉並区立西宮中学校　第2学年　南　　芳　奈　「カウンセリングに対する意識の違いについて」……30
杉並区立西宮中学校　第3学年　百　家　柚　季　「日本とオーストラリアの生活習慣の違い」……31
海　城　中　学　校　第3学年　石　井　捷　斗　「日本とオーストラリアのジェンダーの考え方について」……32
新渡戸文化中学校・高等学校　第2学年　阪　口　弓　太　「幸せな人生と教育」……33
三田国際科学学園中学校　第2学年　奈　良　朔　斗　「多文化共生」……34
共立女子中学高等学校　第3学年　星　野　咲　空　「オーストラリア特有の動物生態と動物保護活動」……35

Ⅲ　留学の思い出……36

思い出写真館 in Australia

結団式　5月29日㊍

事前学習会

区分	日　時	場　所	学習内容
第1回	7月1日(火) 午後5時～午後7時	杉並区役所	○自己紹介 ○個人研究 ○グループ行動の計画 ○英語学習
第2回	7月15日(火) 午後5時～午後7時		
第3回	8月6日(水) 午前9時30分 ～午後0時30分		

1日目　8月14日㊍

オーストラリアへ出発

16:30　羽田空港集合
16:40　出発式
19:40　羽田空港出発

2日目　8月15日㊎

シドニー市内見学、ホームステイ開始

6:20　シドニー空港到着
9:00　シドニー市内等見学・グループ行動
　・ボンダイ・ビーチ
　・ミセス・マッコーリーズ・ポイント
　・オペラハウス　等
16:00　ホストファミリーと対面

3・4日目　8月16日㊏・17日㊐

ホストファミリーと過ごす休日

5・6日目　8月18日㊊・19日㊋

現地校体験1・2日目

(男子) Epping Boys High School
(女子) Willoughby Girls High School
8:30～15:20　ESL (English as a second language)、バディと授業に参加

7日目　8月20日㊌

現地校体験3日目、ウィロビー市長表敬訪問

8:30　ESL、バディと授業に参加
11:00　ウィロビー市内グループ行動
13:00　ウィロビー市長表敬訪問
　・市長からのお話
　・ウィロビー市児童館業務説明

8日目　8月21日㊍

現地校体験4日目

8:30～15:20　ESL、バディと授業に参加

9日目　8月22日㊎

現地校体験5日目(最終日)

8:30　ESL、バディと授業に参加
14:00　フェアウェルパーティー
18:00　閉校式

10日目　8月23日㊏

帰国

6:10　ホテル出発
6:40　シドニー空港到着
8:55　シドニー空港出発
17:45　羽田空港到着
18:45　解散式
19:00　羽田空港解散

事後学習会

区分	日　時	場　所	学習内容
第1回	9月2日(火) 午後5時～午後7時	済美教育センター	○成果報告書の作成 ○研究報告プレゼンテーション準備 ○成果報告会の準備、リハーサル
第2回	9月16日(火) 午後5時～午後7時		
第3回	9月30日(火) 午後5時～午後7時		

成果報告会

日時：令和7年10月13日(月・祝)
　　午後2時～午後3時30分
場所：久我山会館
内容：派遣生による研究・活動報告、派遣生代表挨拶等

結団式　5月29日㊍

1日目　8月14日㊍　オーストラリアへ出発

2日目　8月15日㊎　シドニー市内見学　ミセス・マッコーリーズ・ポイント

2日目	8月15日㊎	シドニー市内見学

2日目　8月15日㊎　ホームステイ開始

3・4日目　8月16日㊏・17日㊐　ホストファミリーと過ごす休日

5〜8日目　8月18日㊊〜21日㊍　現地校体験1〜4日目　Epping Boys High School

5〜8日目　8月18日㊊〜21日㊍　現地校体験1〜4日目　Willoughby Girls High School

7日目　8月20日㈬　ウィロビー市内グループ行動

ウィロビー市長表敬訪問

9日目	8月22日㊎	現地校体験5日目（最終日）　フェアウェルパーティー

閉校式

10日目　8月23日㊏　帰国

10月13日㊊・㊗　成果報告会

Ⅰ　海外留学の概要

1　留学の目的、期間、留学先

(1)　目　的

杉並区の中学生を、交流都市であるオーストラリア連邦ウィロビー市に派遣し、現地校での授業体験や課題解決学習、ホストファミリーとの交流などの体験活動を通して、グローバル社会の中でたくましく生きるために、豊かな人間性や国際感覚、英語によるコミュニケーション能力など、必要な資質・能力の形成を目指す。

(2)　期　間

令和7年8月14日(木)～8月23日(土)　10日間

(3)　留学先

オーストラリア連邦ニューサウスウェールズ州ウィロビー市

2　派遣団一覧

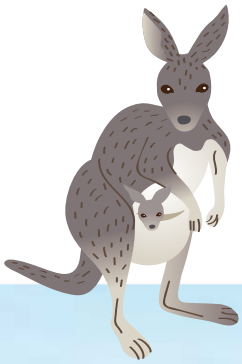
(1)　派遣生徒

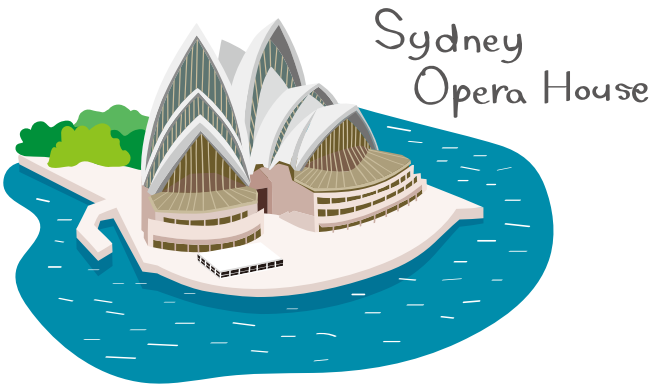
氏　名	学年	学校名	氏　名	学年	学校名
細　野　耕　生	2	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	赤　井　琉　果	2	杉並区立高井戸中学校
工　藤　珠　里	2	杉並区立東田中学校	岩　田　　謡	2	杉並区立高井戸中学校
小　巻　優　梨	2	杉並区立東田中学校	前　澤　理　公	3	杉並区立向陽中学校
大　島　凛　音	2	杉並区立松溪中学校	吉　澤　　葵	2	杉並区立向陽中学校
神　山　未柚子	2	杉並区立天沼中学校	大　矢　沙　和	2	杉並区立泉南中学校
渡　邉　梅　花	2	杉並区立天沼中学校	南　　芳　奈	2	杉並区立西宮中学校
五十嵐　高　澄	2	杉並区立東原中学校	百　家　柚　季	3	杉並区立西宮中学校
松　岡　あさひ	2	杉並区立中瀬中学校	石　井　捷　斗	3	海城中学校
山　本　光　音	2	杉並区立井草中学校	阪　口　弓　太	2	新渡戸文化中学校･高等学校
木　村　太　洋	2	杉並区立宮前中学校	奈　良　朔　斗	2	三田国際科学学園中学校
山　口　琴　音	2	杉並区立富士見丘中学校	星　野　咲　空	3	共立女子中学高等学校

(2)　引率者

氏　名	所属・職	氏　名	所属・職
渋　谷　正　宏	杉並区教育委員会 教育長	内　田　広　志	杉並区立済美教育センター 指導主事
古　林　香　苗	杉並区立済美教育センター 所長	八　田　優　香	杉並区立済美教育センター 教育指導係
樋　川　達　郎	杉並区立済美教育センター 指導主事	本　間　洋　平	杉並区立済美教育センター 教育指導係

Ⅱ　個人研究の報告





オーストラリアの学生のスポーツ環境について

杉並区立阿佐ヶ谷中学校　第2学年　**細　野　耕　生**

1　研究テーマの設定の理由

私はスポーツが好きなので、スポーツ大国オーストラリアの同世代の学生がどのような環境でスポーツをしているのか調べたいと思いました。また、日本より様々な国の生徒がいる多国籍な環境の中で、どのようにコミュニケーションを取っているのかも調べてみたいと思い、このテーマを設定しました。

2　事前調査

日本とオーストラリアの学生のスポーツ環境を比較するために、阿佐ヶ谷中学校の生徒(第2学年男子)に、スポーツに関するアンケートを取りました。「日本語を母語としない人と一緒に運動やスポーツをしたことがある」と回答した生徒が30%いました(図1)。その時の感想は「楽しかった」「新鮮で良い経験になった」「ジェスチャーで伝え合った」等、前向きな意見があった一方で、「相手の言語が分からないから、何をするのか分からなかった」という意見もありました。また、半数以上の人が「様々な国の人と一緒に運動やスポーツをしてみたい」と回答しています。

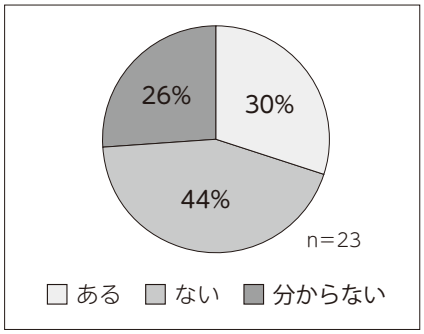


図1　日本語を母語としない人と一緒に運動やスポーツをしたことがありますか?

3　現地での調査

現地のEpping Boys High Schoolの学生に同じ内容のアンケートを取りました(図2)。日本と違い、様々な人種や国籍の生徒がいたので、英語が母語でない人と一緒にスポーツを楽しむことは特別なことではない印象を受けました。アンケートにも「身振りでコミュニケーションを取ることができるし、相手の言語も話せたのでそれほど難しくなかった」「言葉の壁が気にならなかった」という回答を得ました。

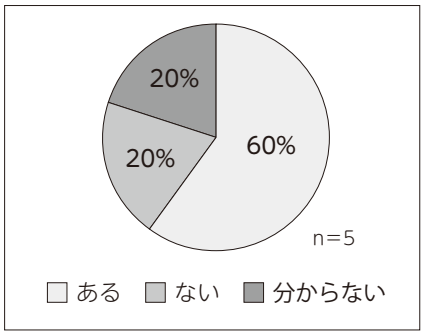


図2　英語を母語としない人と一緒に運動やスポーツをしたことがありますか?

私は現地の生徒と一緒に卓球をする機会がありました。お互い卓球の基礎があったので、ラリーが続き、楽しかったです。卓球の他にも、広大な敷地の現地校には、テニスコート、バスケットボールコート、グラウンド、体育館があり、気軽にスポーツができる環境が整っていました。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

日本の学生は、学校の部活動やスポーツクラブやスクールに所属し、技術向上を目指して練習するのが一般的ですが、オーストラリアの学生は、多様性や楽しむことを重視し、気軽にスポーツができる環境が身近にあり、より多くの人がスポーツに親しんでいるようです。スポーツはコミュニケーションツールであり、言葉の壁を超えた国際交流ができるものだと実感しました。日本の学校では、体育の授業以外で自分が所属する部活以外のスポーツに触れる機会がほとんどありません。休み時間や放課後に、もう少し気軽に様々なスポーツを楽しめる環境があると良いのではと思いました。どの国の人とも一緒にできるスポーツがあれば、コミュニケーションが取れるチャンスにつながると思います。

オーストラリアに少子化問題はあるのか

杉並区立東田中学校　第2学年　工　藤　珠　里

1　研究テーマの設定の理由

私がこのテーマを設定した理由は、オーストラリアが、日本と同様に少子化などの問題を抱えているのか気になったからです。そして、同じような問題を抱えているのなら、どのような解決策を練っているのか。また抱えていないなら、そのことに多文化主義政策などが関係しているのかなどを知りたいと思いました。

2　事前調査

日本で少子化が社会問題となっている理由は、このままだと働き手が不足し、社会保障制度が崩れる恐れがあるからです。私は、日本の合計特殊出生率が減少している理由は時代とともに考え方が変化し、女性が家庭に入らなくても好きな仕事を長く続けられるようになったことが大きいと思います。実際、昨年の日本の合計特殊出生率は1.15で出生率世界ランキングでは下から15番目と、世界的にも低いことが分かります。それに対し、オーストラリアの出生率は1.73と、日本に比べて高いです(図1)。

合計特殊出生率(2024年)	
日本	1.15
オーストラリア	1.73

図1

3　現地での調査

シドニーにいた親子10人に、まずオーストラリアで「子育てはしやすいと思いますか？」という質問をしたところ、10人全員が「しやすい」と答えました。次に、「オーストラリアの子育てがしやすいところはどのようなところですか？」という質問をしたところ、「外や学校が安全なところ」「良い教育が受けられること」などが多かったです(図2)。

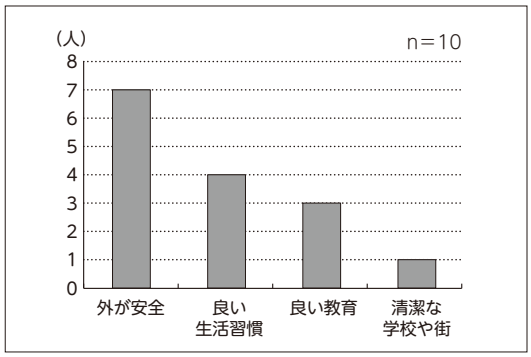


図2　オーストラリアの子育てがしやすいところ

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

調査結果から、オーストラリアは安全で良い教育が受けられることなどから、子育てがしやすいということが分かりました。留学中にウィロビー市役所に訪問した際に市議の方に、ウィロビー市やオーストラリアではどのような少子化対策をしているのか質問しました。その結果オーストラリア全体で出生率は上昇していて、それに加えてオーストラリアに移民してくる子どもも増えているので、子どもの数が増えているということが分かりました。その中でもインドや中国など、アジアからの移民が多く見られます。少子化対策として、出産時や子育て期間中に国や市が補助を出す制度もあるそうです。少子化問題が大きな問題となっている日本は、オーストラリアと同様に安全で良い教育を受けることができるという条件はそろっています。国民である私たちも少子化問題を重要視し、移民を受け入れることをポジティブに捉え、移民を積極的に受け入れる政策をとることが、日本に住む外国人への理解を深めていき少子化問題解決への道につながると思いました。

5　参考文献

●セカイハブ編集部(2024/7/13)　【2024年最新】世界の合計特殊出生率ランキング(CIA) | 日本は227の国と地域の中で212位　世界とつながるグローバルメディア Sセカイハブ
https://sekai-hub.com/posts/cia-total-fertility-rate-ranking-2024

オーストラリアの学校の外国から来た転校生への対応について

杉並区立東田中学校　第2学年　**小　巻　優　梨**

1　研究テーマの設定の理由

私が今回オーストラリアの外国から来た転校生への対応を調べた理由は、自分自身も外国に転校したことがあり、その時に学校の対応がとてもよく印象に残っていたからです。調べてみたところ、オーストラリアは多様性に富んだ国だということを知りました。そんなオーストラリアと日本とでは外国から来た転校生への対応はどのように違うのか、日本の学校で生かせることは何かないかを今回調べました。

2　事前調査

右の表は東京都に在住している外国人の内訳です。この表から東京都にはアジア系外国人が多いということが分かります。学校でも先生方に調査をしたところ5人中5人の先生がアジア系外国人を受け持ったことがあると答えました。海外から転校してきた生徒に対して学校では、「教科書にルビを振る」、「サポートの生徒をつける」といった対応をしており、「特別に日本語の授業をする」などは聞かれませんでした。しかし杉並区では、区や地域の団体が日本語教室や学習支援を行っていることが分かりました。

表1　東京都の在住外国人の人口・割合

区　分	人　口	割　合
アジア系	56.8 万人	87.7%
ヨーロッパ系	3.7 万人	5.7%
北米系	2.5 万人	3.9%
南米系	0.8 万人	1.2%
アフリカ系	0.5 万人	0.7%
オセアニア系	0.5 万人	0.7%
その他・無国籍	0.04 万人	0.1%
合　計	64.7 万人	

（参考）東京の人口は1,426万人（2025/7現在）

3　現地での調査

現地の学校の先生に調査をしてみたところ、オーストラリアの学校には様々な国籍の方々がいて、中でもアジア系の人々が多いことが分かりました。様々な国から来るため英語が分からない転校生へのサポートがたくさんありました。例えば、サポートの先生をつける、特別に英語の授業を行う、英語のアプリで勉強をするなどです。さらに、宗教への理解が深く、プールの授業を受けられず見学した生徒がいた場合でもレポートを書いて出席扱いにするという事例もあることが分かりました。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

今回の調査から、私はオーストラリアの学校は様々な国籍の生徒がいるため、外国から来た転校生に対して日本よりも手厚い対応が行われていると感じました。こうした手厚い対応を可能にしているのは教員の研修内容が関係していると思います。オーストラリアの教員研修では多文化教育や第二言語習得について学ぶ機会が多いようです。そこで私は、日本の教員研修でも多文化教育や第二言語習得について学ぶ機会を設けるべきだと考えました。そうすることでオーストラリアの教育に近づくことができるのではないでしょうか。

5　参考文献

●(1)　東京都の国・地域別外国人人口（各年1月1日現在）
https://portal.data.metro.tokyo.lg.jp/visualization/foreign-population-in-tokyo-by-country-and-region/

●(2)　「2016年度 教員海外研修」開催 | 公益財団法人日本英語検定協会
https://digitalpr.jp/r/19194

日本とオーストラリアの教育環境の違い

杉並区立松溪中学校　第2学年　**大　島　凛　音**

1　研究テーマの設定の理由

オーストラリアの教育について調べたところ、基本的に中高一貫校で自主性を尊重し、得意分野を伸ばすことを大事にしていることが分かりました。現地の学校生活を体験しながら、授業内容や校則、進路の決め方等、日本との違いを調べ、それぞれの良さを考えてみたいと思いました。

2　事前調査

松溪中学校の第2学年を対象に「あなたが考える良い教育環境とは何ですか」というアンケートを行いました（図1）。その結果、「一人ひとりに合った学習をすることができる環境」が22人（約31%）という結果となりました。

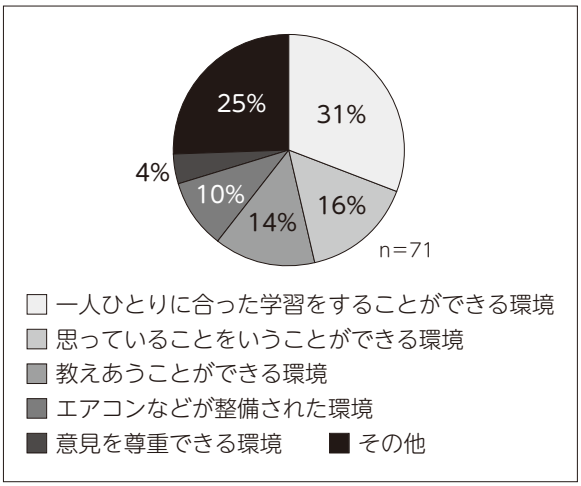


図1　あなたが考える良い教育環境（松溪中学校）

3　現地での調査

現地の生徒にも日本と同様に「あなたが考える良い教育環境とは何ですか」と聞いたところ、図2を見て分かるように「静かな場所」、「きれいな場所」といった意見が多かったです。

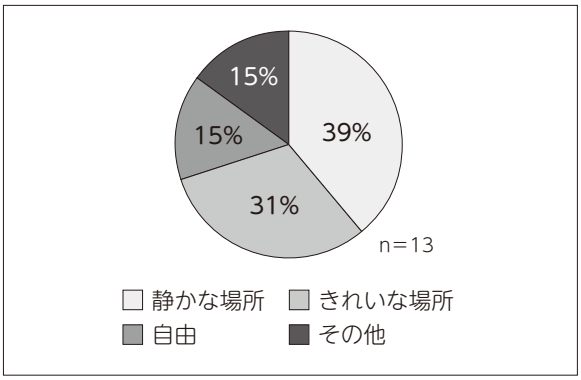


図2　あなたが考える良い教育環境（現地校）

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

オーストラリアの生徒は、図2の結果から集中しやすく快適に学習できる空間を第一に求めていることがうかがえます。

日本の生徒に行ったアンケートでは、「静かな場所」「きれいな場所」という回答が1つもありませんでした。日本の教育環境は、きれいなことが当たり前であり、衛生面に関して特に不満に感じないことは、恵まれていると思いました。

日本とオーストラリアの生徒にアンケートを行い、日本の学校は「秩序」「協調性」、オーストラリアは「自由」「個性」を重視していることが分かりました。良い教育環境とは「その国や地域に合った形」で、子どもが成長できる環境をつくることが大切だと感じました。

また、現地の学校に通って、オーストラリアでは生徒が自分の意見をもち、発信する力が重視されていました。日本でも「主体性」を育てる教育が今後ますます重要になると思いました。そして、生徒が「教えられる」のではなく、「自分で考え、選び、行動する力」を育てることが必要だと思いました。

日本とオーストラリアの食文化の違い

杉並区立天沼中学校　第2学年　**神　山　未柚子**

1　研究テーマの設定の理由

オーストラリアの料理・食べ物や、味付けの仕方、作り方を知りたいと思い、また、それが日本とどのような点が違うのか、オーストラリアの文化や生活に影響しているのか気になったので、このテーマにしました。

2　事前調査

天沼中学校の生徒72人に、まず日本の食文化の印象についてアンケートを取ったところ、種類が豊富と答えた人が35%、美味しいと答えた人が32%、見た目がいいと答えた人が18%、健康的と答えた人が15%という結果になりました(図1)。次にオーストラリアで使われている食材の予想とオーストラリアの食文化の印象についてアンケートを取ったところ、肉が多く使われていて、野菜はあまり使われてなさそう、味が濃そうという予想が多くありました。

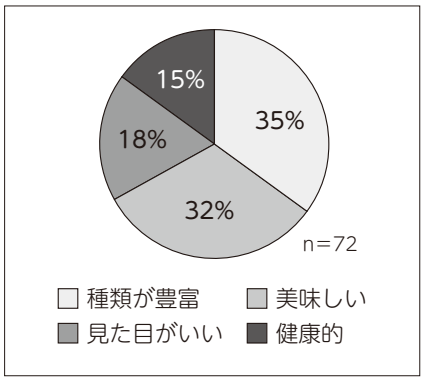


図1　日本の食文化の印象

3　現地での調査

現地の方に知っている日本食のアンケートを取ると、寿司や天ぷら、うどんなどが多く挙がりました。また、現地では、肉が使われた料理が多く、種類も多いということと、多様な食文化があるということが分かりました。実際にスーパーなどに行くと、肉がずらりと並んでいて、すごく種類が多かったです。一方で、料理には野菜もよく使われていて、じゃがいもやレタスを多く見かけました。オーストラリアでは、野菜が盛んに栽培されているということが分かりました。現地での食事は、味が濃いこともなく、お米や魚、野菜が使われた料理も多かったです。日本の食文化と大きく異なっている点はあまりありませんでした。

オーストラリアの食事

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

これらの調査の結果から、日本とオーストラリアの食文化の違いはあまりないことが分かりました。日本食は外国にも知られるくらい知名度が高く、美味しい料理がたくさんあることが分かりました。そして、オーストラリアは色々な国から来た人が多いため、多様な食文化であることや、畜産が盛んで肉の種類や料理が多いことなどが分かり、食文化がオーストラリアの文化や生活に深く関係していることが分かりました。

日本とオーストラリアの食文化の違い

杉並区立天沼中学校　第2学年　**渡　邉　梅　花**

1　研究テーマの設定の理由

オーストラリアは日本と場所が大きく異なっているため、食事の仕方や使用する材料、味付けなどが変わってくると思い、この研究テーマにしました。

2　事前調査

天沼中学校の第2学年71人を対象にオーストラリアの食文化についての意識調査を行いました。調査した内容は、「オーストラリアの食べ物についての認知度」（図1）と「日本の代表的な食べ物」についてです。オーストラリアの食べ物についての認知度では「1つも知らない」や「あまり知らない」と回答している人が半分以上を占めていました。ここから、オースラリアの食は日本には馴染みがなく、知っている人があまりいないことが分かりました。また、日本の代表的な食べ物としては、お寿司や和菓子など、日本の中で歴史のある食べ物が多く挙げられました。

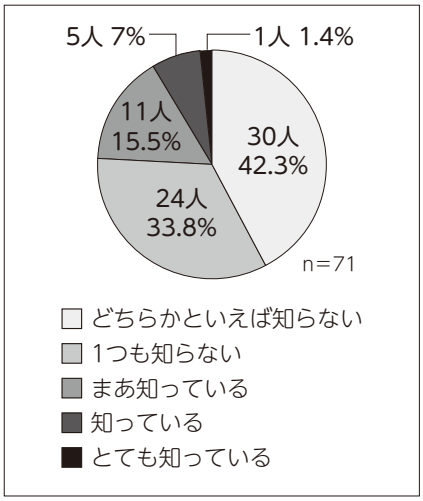


図1　オーストラリアの食べ物についての認知度（天沼中学校）

3　現地での調査

現地では現地校の生徒16人を対象にオーストラリアの食文化についてアンケートを行いました。調査した内容は、よく食べる朝食は何か、日本の知っている食べ物は何かについてです。よく食べる朝食については、米を食べる人が圧倒的に多く、その次に魚を食べる人が多いことが分かりました。また、「知っている日本食」に関する質問では、日本で調査した内容と同じ認知度でしたが、寿司が一番高く、すき焼きの認知度が一番低いことが分かりました（図2）。

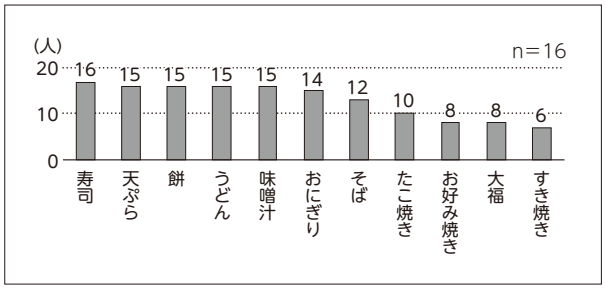


図2　知っている日本食（現地校）

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

よく食べる朝食については、米を主食として魚や肉を食べるなど、日本と同じような献立であることが分かりました。ホームステイ先の朝食は、ホストマザーが日本人だったこともあり、日本と似た朝食が多かったです。また、「知っている日本食」に関する質問では、寿司や天ぷらなど昔から食べ継がれている歴史のある食べ物が多いことが分かりました。日本で行った事前調査と同じ結果でしたが、日本で票の多かった和菓子（大福）はあまり認知度がなく、外国にはまだ伝わっていなかったことが分かりました。

これらのことから、学校でオーストラリアなどの外国の食を学ぶ授業を行ったり、自分から広めていったりすることを提案します。それらを行うことで互いの伝統的な食を知り、身近に感じることができると考えます。この機会を通して、食べ物というより身近な存在からオーストラリアを知っていってほしいと思っています。

日本とオーストラリアの食文化の違い

杉並区立東原中学校　第2学年　**五十嵐　高　澄**

1　研究テーマの設定の理由

僕は食べることが好きです。しかし、オーストラリアの食文化について何も知りませんでした。そこで、実際に日本とどのような違いがあるのかを調べてみました。

2　事前調査

東原中学校の第2学年と先生に普段の食生活で何を食べているか(図1)、オーストラリアの食文化について何か知っているか(図2)、アンケート調査を行いました。日本では、和食を食べている人が多く、洋食を食べている人は少ない傾向にあることが分かりました。実際に学校の給食や日常の食事も和食のほうが多いです。また、オーストラリアの食文化についてあまり知らない人が多いということも分かりました。実際、僕もオーストラリアの食文化については無知でした。

3　現地での調査

現地校の生徒11人、大人2人にも普段の食生活で何を食べているか(図3)、日本の食文化について何か知っているか(図4)、アンケート調査を行いました。オーストラリアでは洋食を食べる人が多く、和食を食べる人はいませんでした。現地でも和食は一度も食べませんでした。しかし、日本の食文化について知っている人のほうが圧倒的に多いということも分かりました。現地にはお寿司がスーパーなどで売られていたり、お寿司のレストランがあったりしました。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

これらの調査から、「日本の食のベースは米」「オーストラリアの食のベースはパン」ということが分かりました。そして、日本はオーストラリアの食文化にあまり興味がない反面、オーストラリアは日本の食文化に興味があるということも分かりました。そこから、僕は「日常の食事から互いの国の料理や食文化を取り入れるべき」ということを提案します。実際に2つのアンケートから、日本は洋食を食べる人はいるものの、オーストラリアの食文化にはあまり興味がありません。逆に、オーストラリアは日本の食文化に興味がある人はいますが、和食を日常で食べている人はいませんでした。そこで、日常から互いの食文化を取り入れることを提案します。そうすることで、その国の歴史や価値観、生活様式への理解が深まります。そして、違う食文化を体験すると、多様な考え方やライフスタイルを尊重しやすくなります。それにより異文化への抵抗感が減り、相互理解や友情が育まれやすくなると思います。

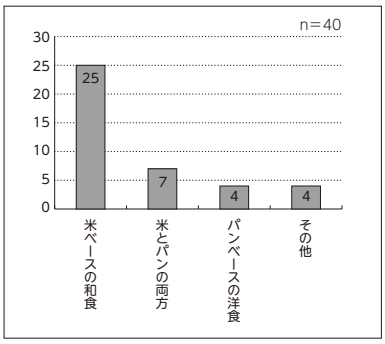


図1　普段の食生活で何を食べているか(東原中学校)

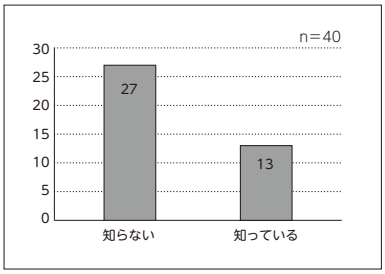


図2　オーストラリアの食文化について何か知っているか(東原中学校)

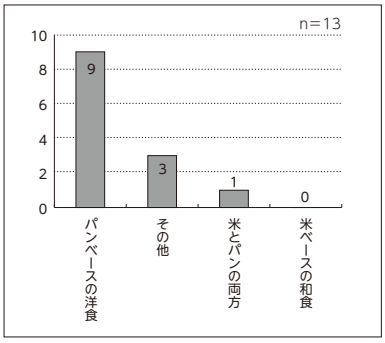


図3　普段の食生活で何を食べているか(オーストラリア)

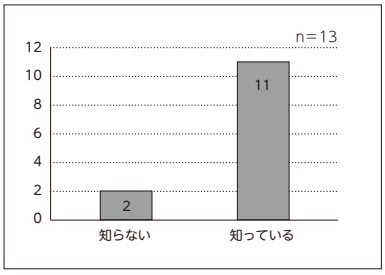


図4　日本の食文化について何か知っているか(オーストラリア)

オーストラリアの多言語状況について

杉並区立中瀬中学校　第2学年　**松　岡　あさひ**

1　研究テーマの設定の理由

オーストラリアは多文化、多言語社会だと授業で習った。多様化が進みつつある日本にとって、多言語での情報発信については学ぶことも多いのではないかと思った。

2　事前調査

まず、日本での多言語状況を知るために、中瀬中学校の先生及び生徒46人に「何か国語を話せるか」というアンケートを行ったところ、日本では日本語のみを話す人が87%と多かった(図1)。一方で、街中での多言語表記は多数見つかった(表1)。

さらに、杉並区のALTの先生方へ日本の多言語での情報発信に関するアンケートを行った結果、約9割の先生が日本で言語面での困難さを感じたことがあると回答した(図2)。

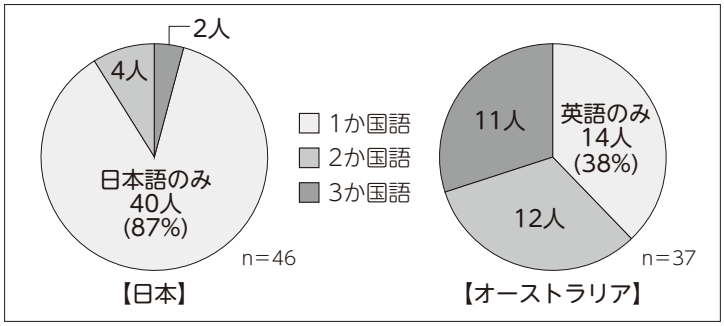


図1　話せる言語数の違い

	英語	中国語	韓国語	その他
スーパーマーケット	○	×	×	×
衣料品ストア	○	○	○	×
百円ショップ	○	○	○	×
下井草図書館	○	○	○	×
ホームページ（杉並区）	○	○	○	○

表1　案内表示に使われている言語

3　現地での調査

シドニー市街頭で20人、Willoughby Girls High Schoolで17人に対してアンケートを行い、①何か国語(何語)を話せるか、②多言語社会の良いところは何かを調査した。また、市内のレストランやスーパー、ホームステイ先のテレビなどの表示を確認した。

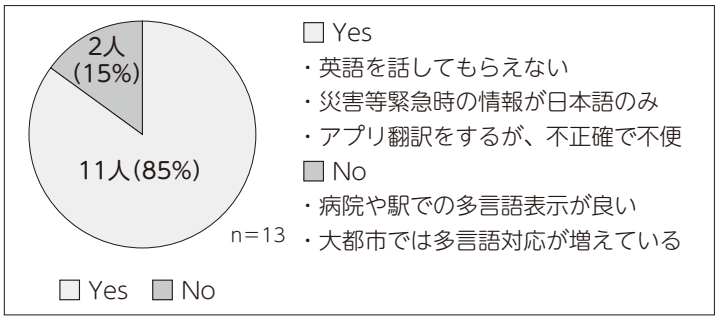


図2　言語の壁によって苦労したことはあるか

結果、オーストラリアでは、1か国語のみ話す人よりも、複数の言語を話す人のほうが多かった(図1)。また、話せる言語の種類も多様であった。中学校でも複数の言語を学ぶことができ、お互いに異なる文化を知り、尊重する姿勢がある。ただ、市内の表示やTVでは英語しか使われておらず、予想外だった。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

オーストラリアは、異なる言語を話す者同士、お互いの文化を学び、尊重する姿勢が印象的だった。対して日本でも、多言語での案内表示を丁寧に行っており、多言語対応への取組が見られた。私は今回の研究を通じて、日本がより良い多言語社会を目指すには、外国人と日本人がお互いを尊重し認め合っていく意思が大切だと思った。お互いに興味をもって分かり合おうとすることで、海外から来た人も、日本に住んでいる人も助け合いながら、安心して過ごすことができる環境がつくられていくのではないかと私は考えた。

5　参考文献

●(1)　杉並区HP　https://www.city.suginami.tokyo.jp/
●(2)　出入国管理庁HP　https://www.moj.go.jp/isa/
●(3)　ABS（オーストラリア統計局）HP　https://www.abs.gov.au/

日本とオーストラリアの音楽観の違い

杉並区立井草中学校　第2学年　**山　本　光　音**

1　研究テーマの設定の理由

私は吹奏楽部に所属しており、「音楽」は人々を感動させ日常には欠くことができないものと感じています。そこで日本とオーストラリアでは音楽観に違いがあるのかを疑問に思い、このテーマを設定しました。国によって「音楽」への感じ方や進化に違いがあるのかを、私が吹奏楽部で担当している管楽器を通して探ってみようと考えました。

2　事前調査

井草中学校の第2学年の生徒を対象に日本の音楽観について調査を実施しました(図1)。この結果から、日本は音楽がなくても生活に困らないと考える人が11%もいることが分かりました。この結果を管楽器の歴史と紐づけて考えました。日本に現存する最古の管楽器である「笙(しょう)」は古くから天の音を奏でる神聖な楽器として存在し、一般的には日常生活とは離れたものということが文献などから分かりました。

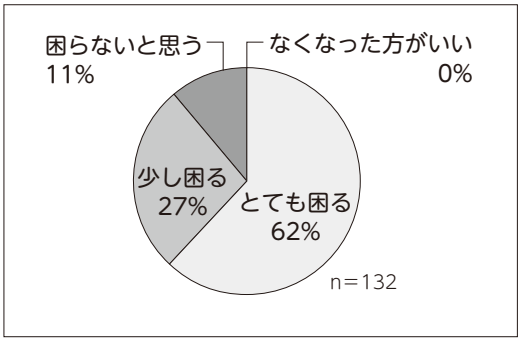


図1　音楽がなくなったらあなたの生活に影響はあるか

3　現地での調査

Willoughby Girls High Schoolの生徒を対象に日本と同様に音楽観について調査を実施しました(図2)。オーストラリアのほうが「音楽」は日常生活に欠かせないものだと思っている人が多い結果となりました。これはオーストラリアの伝統楽器・世界最古の管楽器「ディジュリドゥ」とも結びついていると考えます。オーストラリアではディジュリドゥを祖先の霊とつながる儀式に使用したり、歌や踊りの娯楽に使用したり、子どもに伝統の物語を教えたりするなど日常生活に欠かせない存在とされていることがオーストラリア博物館を訪問して分かりました。

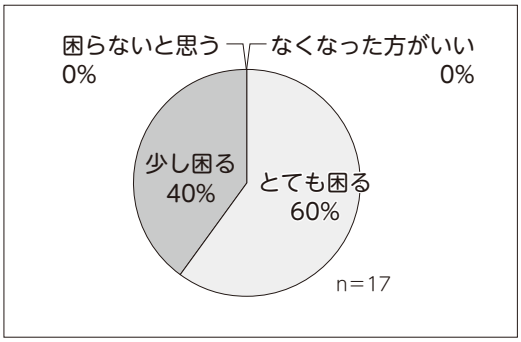


図2　音楽がなくなったらあなたの生活に影響はあるか

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

今回の調査を通して、日本は音楽がなくても生活に困らないと考える人がいましたが、オーストラリアではそのような回答は見られず、日本とオーストラリアでは音楽観に違いがあることが分かりました。日本では音楽が「神聖なもの」と考えられていたため、日常生活とは離れたものでした。一方オーストラリアでは、ディジュリドゥを通じて音楽が祖先や日常生活と深く結びつき、今も身近な存在として受け継がれています。日本とオーストラリアの音楽観の違いは人々が昔どのように音楽と関わっていたかが、今も影響していると考えます。

今回の研究テーマを通して私が感じたことは、伝統音楽を学ぶことの大切さです。音楽が人々の生活や文化と深く関わっていることを知り、音楽の豊かさや奥深さを改めて実感しました。この学びを生かして吹奏楽部での活動や音楽への知識を深めていきたいと思いました。

5　参考文献

●(1)　堀内久美雄　「新音楽辞典　楽語」　音楽之友社(2011年)
●(2)　小野幸恵　「日本の伝統芸能は面白い④　東儀秀樹の雅楽」　岩崎書店(2005年)

日豪の移民政策の比較から学ぶ日本の未来

杉並区立宮前中学校　第2学年　**木　村　太　洋**

1　研究テーマの設定の理由

オーストラリアについて調べる上で国の歴史的背景を学び、様々な文化や民族を尊重し、共存を目指す多文化主義国家であることを知りました。多文化を尊重するこれからの時代に、日本はどのような国を目指すべきかを学びたいと思い、このテーマを設定しました。

2　事前調査

日本で自分の身近な人に「日本の移民政策」に関するアンケートを行ったところ、日本の移民受け入れ環境整備についての質問で、「整備が進んでいない」という意見が7割ほどで「整備が進んでいる」という意見が3割ほどありました（図1）。

また、日本は各国と比較して、移民に対する生活保護の条件が緩いという意見もありますが、生活保護を受けている移民の割合が高いということは全くないと分かりました。

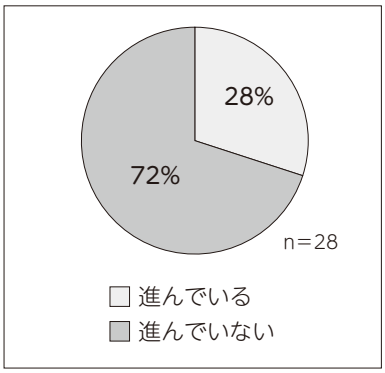


図1　日本の移民受け入れ環境整備は進んでいるか

3　現地での調査

オーストラリアの市民やウィロビー市役所の職員など18人に、オーストラリアの移民政策に関する調査を行いました。オーストラリアで日本と同じ質問をしたところ、日本とは違った意見が多くありました。政策は進んでいるという前提のもと「移民が増えすぎている」という意見です。「移民政策に税金を使いすぎている」など国民と移民への支援のバランスを考えるべきだという意見が多くありました。

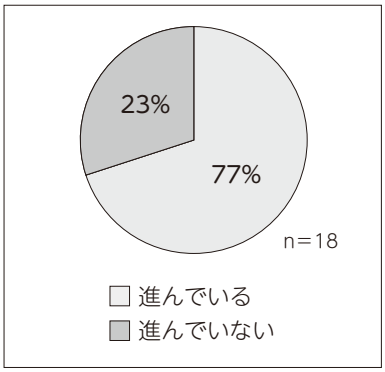


図2　オーストラリアの移民受け入れ環境整備は進んでいるか

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

今、日本は少しずつ多文化共生に向かっていますが、そのうえで大切にしなければならないことがあると思います。日本では「移民は日本の労働者不足の助けになる」という意見や「移民の増加により生活保護などを受ける人が多くなる」という意見など、賛成・反対に対する様々な声が挙がっています。

僕はまだ何が正解なのかは分かりませんが、日本は少しずつ多文化共生に向かっているので、一人ひとりがもっと関心をもつべきなのではないかと思います。オーストラリアなど移民政策が進んでいる国を参考にしつつ、国民の意見を聞くことが大切だと考えました。

5　参考文献

●(1)　日本の移民政策が置き去りにしていること | Meiji.net（メイジネット）明治大学
https://www.meiji.net/international/vol461_nebashi-reiko

●(2)　オーストラリアに垣間見る「多文化主義政策」　日常に浸透するダイバーシティと移民への定住支援　未来コトハジメ
https://project.nikkeibp.co.jp/mirakoto/atcl/global/h_vol29/

日本とオーストラリアの野生動物への意識の違いについて

杉並区立富士見丘中学校　第2学年　山　口　琴　音

1　研究テーマの設定の理由

オーストラリアでは珍しい固有種が多く生息しており、人々は動物たちと共存して生きています。しかし、日本ではそこまで野生動物に関心をもっている人は少ないと思います。そこで、それぞれの国の動物に対する価値観の違いを知りたいと思い、このテーマを設定しました。

2　事前調査

富士見丘中学校の第2学年A組で野生動物を保護したことがあるかについてアンケート調査を行いました(図1)。

その結果、ほとんどの人が野生動物を保護したことがないということが分かりました。このことから、割合でみると都内の中学生は野生動物との関わりが少ないといえます。

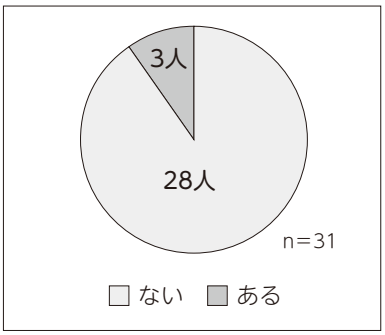


図1　野生動物を保護したことがあるか(日本)

3　現地での調査

現地校でも同様に15人の生徒に野生動物を保護したことがあるかアンケート調査を行いました。すると、15人中5人が「ある」と回答しました。なんと、日本の約3倍も多いということが分かりました。また、その状況を聞いたところ、主にセキセイインコの赤ちゃんやゴシキセイインコなどの鳥類、オポッサムなどの小動物を家の近くなどの身近な場所で保護していることが分かりました。

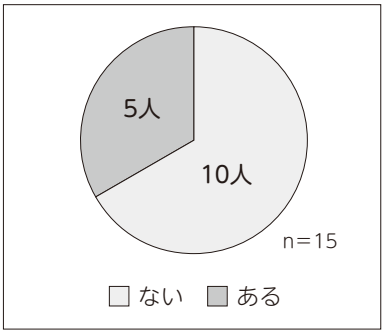


図2　野生動物を保護したことがあるか(オーストラリア)

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

以上の結果から、オーストラリアは日本より野生動物保護に対する意識が圧倒的に高いことが分かりました。

オーストラリアには固有種が多く存在し、人々は動物と共存して生きています。実際に私は現地校で出会った友達とインコに餌をあげました。こんなに近くで野生動物と触れ合える機会は都内にはあまりないので、とても素敵だと感じました。

一方、都内には野生動物に対する意識があまりないと思います。美しい日本の自然環境を守るためにも、動物が好き嫌いに関わらず一人ひとりが野生動物に関心をもつことが大切です。

図3　インコにりんごをあげる様子

日本とオーストラリアのテニスに対する意識差

杉並区立高井戸中学校　第2学年　**赤　井　琉　果**

1　研究テーマの設定の理由

私は小学校の頃からテニスを習っています。テニスの四大大会の開催地であるオーストラリアでは日本とテニスに対する意識などが異なるのか気になりました。また、強豪国のテニスに対する意識を知ることでテニスがうまくなるヒントを得たいと思い、このテーマを設定しました。

2　事前調査

高井戸中学校第2学年の生徒にアンケートを取ったところ、テニスを好きと答えた人は全体の30%ほどでした。また、テニス経験がある人は全体の31%でした(図1)。これらの結果から、テニスはメジャーなスポーツではないということが言えます。その要因の一つに、高井戸中学校では保健体育の授業でテニスを行わないということが挙げられるでしょう。

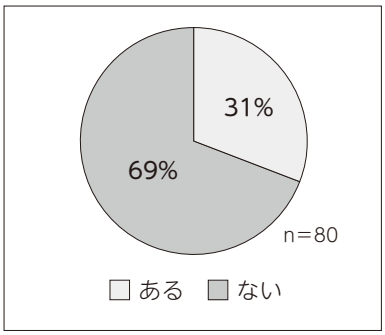


図1　テニスをしたことがあるか
(高井戸中学校)

3　現地での調査

私はオーストラリアでアンケートや街頭インタビューなどを行い、計12人にテニスに関する質問を行いました。私がオーストラリアで通ったEpping Boys High Schoolでは、毎週水曜日がスポーツの日になっていて、学生全員がスポーツを行っていました。行うスポーツはテニス、バスケットボール、バレーボール、卓球やオーストラリアンフットボールなどです。テニスをしたことがあるかオーストラリアの人に質問したところ、あると答えた人が約70%で、テニス経験がある人とない人の比率は、日本とは真逆でした(図2)。

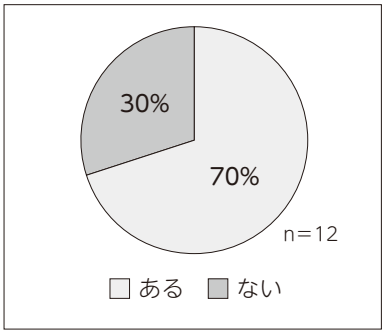


図2　テニスをしたことがあるか
(オーストラリア)

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

オーストラリアでテニスをしたことがあると答えた人のほとんどが、学校でプレイしたと答えていました。私が通っている高井戸中学校にはテニスコートがないので、やはりオーストラリアではテニス教育が盛んということが言えるでしょう。また、テニスをしたことがあると答えた人全員が「テニスが好き」と答えていました。

以上のことから、私はテニスを学校の授業で行うことを提案します。そうすることで、テニスへの興味が生まれることやテニスを好きになるきっかけになり、日本もテニス強豪国として世界と戦えるようになる可能性があるからです。そしてテニスの魅力が世界中に広まり、テニスやスポーツ全体が活性化し、世界中の人が健康に楽しく、スポーツに関わることができると考えました。

日常と音楽

杉並区立高井戸中学校　第2学年　岩　田　　謡

1　研究テーマの設定の理由

僕は中学校で吹奏楽部に所属していて、音楽を通して人とつながることが好きです。そこで、人々の生活と音楽がどのように関わっているのか、日本とオーストラリアでの音楽に対する認識の違いなどを知りたいと思い、このテーマを設定しました。

2　事前調査

事前調査では、音楽に対する認識を知るため、僕の家族と僕が在学している高井戸中学校の生徒合計53人を対象に、生活の中の音楽の役割（図1）、音楽をどんな時に聴くかなどの10項目のアンケートを取りました。その結果、右図のようになっていることが分かりました。結果から、多くの人は自分の気分や、やる気をプラスにするために音楽を聴いていることが分かりました。また、「歌詞の意味を考えるか」という質問に対しては、53人中45人が考えたことがあるという結果になりました。僕はこの結果から、歌詞の意味を考えることで自分と照らし合わせたり、新しい考えや元気、勇気などを曲からもらおうとしたりしているのではないかなと思いました。

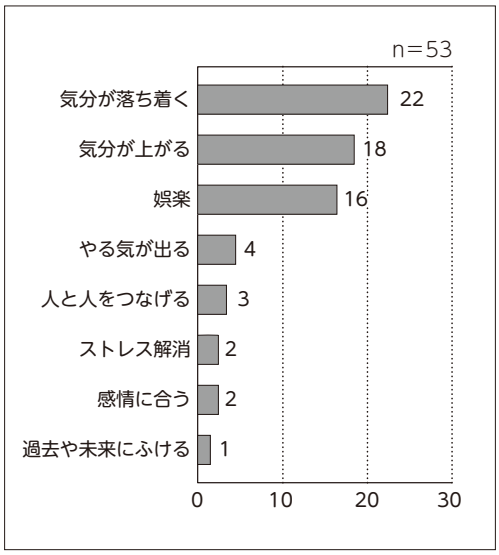


図1　音楽の役割（自由記述）（複数回答可）

3　現地での調査

現地では、事前調査で行ったときには10あった質問から、必要なものを考え5つにまとめ、街頭インタビューと現地校でのアンケート調査を行いました。日常の中での音楽の役割について聞いた質問では、「気分を盛り上げる」「落ち着かせてくれる」などの日本で出たものと同じ意見と、「とても重要」「絵や景色と同じで美しいもの」「集中力が上がる」「歌っている人の感情やメッセージが伝わる」「日常を退屈ではなくさせてくれる」「穏やかで幸せな人生を送るための一つ」などのオーストラリアだけで出た意見がありました。また、アンケートを行った全員が歌詞の意味を考えたことがあるという結果になりました。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

今回の調査の結果から、日本とオーストラリアの音楽観には大きな違いはないけれど、細かいところに日本との差があることが分かりました。例えば、「集中できる」という意見は後から見てみると、日本でも出そうだけど出なかった意見でした。また、年齢層によっても差があると感じました。日本での「その時の感情に合う」「過去や未来にふける」やオーストラリアでの「絵や景色と同じで美しい」「日常を退屈ではなくさせてくれる」などの意見は、どちらも大人の方から出た意見でした。このことから、音楽観は大人になるにつれて成長していくものなのではないかと考えました。

日本とオーストラリアの教育の違いに関する比較研究

杉並区立向陽中学校　第3学年　**前　澤　理　公**

1　研究テーマの設定の理由

私は小学校低学年の頃、反抗期で先生や親に迷惑をかけた経験から、教師の指導方法に自然と興味をもつようになりました。どのような言葉や接し方が心に響くのかを観察するうちに、国によっても教育スタイルが違うのではないかと考えるようになり、日本とオーストラリアの教育や指導方法を比較したいと思いました。

2　事前調査

⑴　インターネットを使って両国の教育の特徴を調査した。
　日本：知識の習得や集団行動が重視され、講義中心の授業が多い。
　オーストラリア：個人の意見や自主性を尊重し、対話やグループ活動、ICTの活用が進んでいる。

⑵　日本の教師(6名)に対してアンケートを実施した。
【主な質問内容】
・勉強の目的は何か・授業で重視していること・生徒の様子や接し方・いじめ防止策
・卒業時に育てたい力　・生徒に何を学んで卒業してほしいか(図1)

3　現地での調査

オーストラリアの教師(9名)に対してアンケートを実施した。
【主な質問内容】
・勉強の目的は何か・授業で重視していること・生徒の様子や接し方・いじめ防止策
・卒業時に育てたい力　・生徒に何を学んで卒業してほしいか(図1)

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

【勉強の目的】
〇日本：人生を豊かにする。自分を磨く。学びの楽しさを知る。多角的思考を育てる。
〇オーストラリア：大学進学・就職など将来のため。自信や能力を育てる。知識を養う。
【いじめ防止策】
〇日本：日常的な観察と対話で生徒の変化に気付き、信頼関係を築くことを重視する。
〇オーストラリア：明確なルールや罰を通じた制度的管理をする。
　　教師が規律を重視し、教室内の環境を整備する。

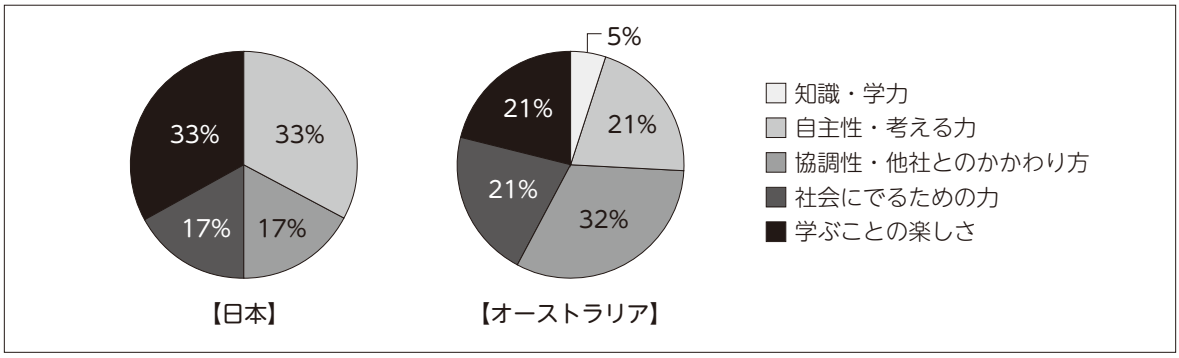


図1　生徒に何を学んで卒業してほしいか?

勉強の目的について、日本の教師は内面的な成長や学ぶ楽しさといった「人間的成長」を重視しており、オーストラリアの教師は将来の進路や能力の向上といった「実用的・将来志向」を強調していました。いじめ防止策においては、日本は日々の観察や対話といった「人間関係・信頼」で防ぐ姿勢が強いのに対し、オーストラリアはルールや罰などの「システム」で対応していることが分かりました。

教育のスタイルや考え方は国によって大きく異なりますが、どちらも生徒の成長を願っている点は共通しています。制度で管理する方法も、人とのつながりで支える方法も、それぞれの社会や文化に合った形で成り立っていると感じました。どちらの方法も取り入れることで、より多様な生徒に対応できる教育が実現できるのではないかと考えます。

5　参考文献

●⑴　文部科学省　https://www.mext.go.jp/　2025.10
●⑵　“Education in Australia”（Wikipedia）https://ja.wikipedia.org/wiki/　オーストラリアの教育　2025.10

多文化共生を実現させるにはどうすればよいのか

杉並区立向陽中学校　第2学年　吉　澤　　葵

1　研究テーマの設定の理由

最近、SNS上で在留外国人に対して否定的な発言をよく目にするようになり、日本で在留外国人をどう受け入れればよいかを考えるようになりました。人口の3分の1が在留外国人であるオーストラリアでは、具体的にどのようにして在留外国人を受け入れているのかを現地で調査し、日本と比較しようと考え、テーマ設定をしました。

2　事前調査

向陽中学校で「在留外国人について何か考えたことはあるか」「在留外国人についてどのような印象を持っているか」というアンケート(図1、図2)を取りました。図1のアンケートの結果、考えたことがない・あまりない人が全体の約3分の2いました。

図2の結果からは在留外国人への印象は特にないという人が多いことが分かります。この2つのアンケート結果から、向陽中学校では在留外国人のことを考えたことがない、特に印象はない、という人がそれぞれ約3割程度いることが分かり、日本が直面している大きな問題に対する関心があまりないように感じました。また、実際に在留外国人と接したことがある人の回答はよい印象が8割を占めていました。

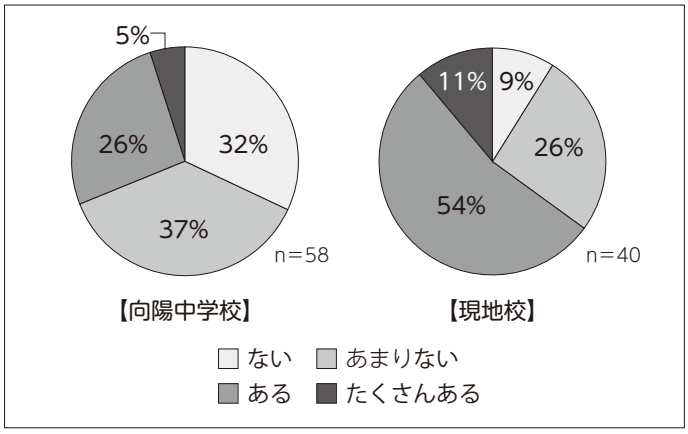


図1　在留外国人について何か考えたことはあるか

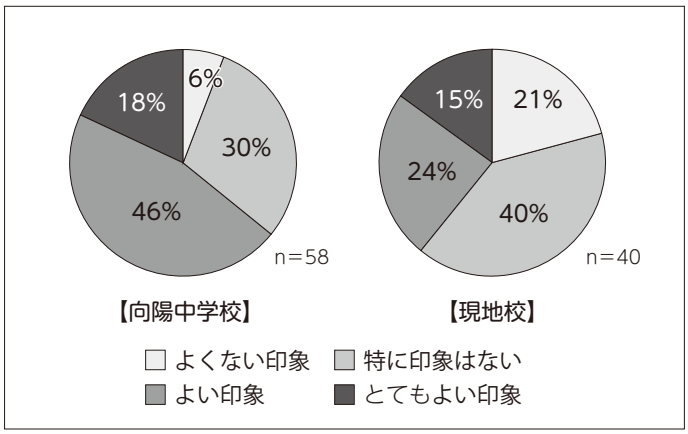


図2　在留外国人についてどのような印象を持っているか

3　現地での調査

現地の男子校で、私は日本でのアンケートと同じ内容のアンケート(図1、図2)を取りました。すると、在留外国人のことを考えたことがない人は9%しかおらず、65%の人は在留外国人への関心があることが分かりました。一方で、印象に関しては「とてもよい印象」「よい印象」と答えた人が39%いました。しかし、「よくない印象」と答えた人も21%おり、否定的な見方もありました。このことから、移民が多く暮らすオーストラリアでも、肯定的な意見と否定的な意見が共存していることが分かりました。

4　調査結果・調査から分かった事・私からの提案

アンケートを取ると、日本での結果とは大きく違い、オーストラリアでの結果では在留外国人について考えたことがないという人は9%しかいませんでした。このことから、オーストラリアでは在留外国人への意識がとても強いことが分かりました。これらの結果から僕は、日本での在留外国人に対する根拠のない批判をなくし、共存への道をつくるためにも、在留外国人と関わる場を設けることが大切だと思いました。

放課後の過ごし方の違いについて

杉並区立泉南中学校　第2学年　大　矢　沙　和

1　研究テーマの設定の理由

日本では部活動など放課後に学校で行う活動がありますが、それに近いものはオーストラリアにはあるのかが気になったのでこのテーマを設定しました。また、勉強をする、友達と遊ぶ、家でゲームをする、スポーツをするなどオーストラリアの生徒がどのように過ごすのか興味をもちました。

2　事前調査

私は泉南中学校の第2学年B組を対象に放課後の過ごし方についてアンケートを取りました。すると、勉強している、習い事をしていると答えた人は数人いたものの、半数以上の人がスマホを触っている、ゲームをしていると画面を長時間見て過ごしていることが分かりました。また、オーストラリアの生徒の放課後の過ごし方についてのイメージを調査すると、スポーツをしている、勉強している、海に行くなどの考えが出ました。そして、オーストラリアの部活動の有無について予想をしてもらうと、オーストラリアに部活があると考えた人は18人で全体の約7割、部活はないと考えた人は8人で約3割を占めました（図1）。

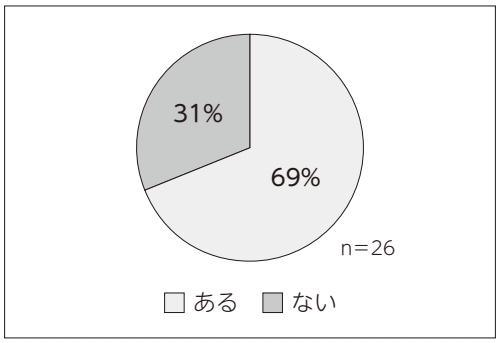


図1　泉南中学校におけるオーストラリアの部活動の有無についての予想

3　現地での調査

現地で調べると、オーストラリアには部活動といったものは存在しないことが分かりました。そこで私は①放課後どのように過ごしているのか、②日本の部活に対してどのように思うかを現地校の生徒18人にアンケートを取りました。①の質問に対し、一番多かったのは友達と会う、遊ぶと答えた人で8人、二番目に多かったのはペットの散歩と答えた人で4人という結果になりました。日本ではなかったペットの散歩をしている人が4人と多かったため、オーストラリアでペットを飼っている世帯割合を調べてみると、全体の約69%がペットを飼っていることが分かりました。比較するために日本でペットを飼っている世帯割合を調べてみると、約20%とオーストラリアの3分の1以下であることが分かりました。また、②の質問に対し、生徒全員が部活動はよい活動だと答えてくれました。理由として「健康的だから」「一日を有効的に使えていると思うから」などが挙げられました。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

アンケート結果から、私は日本の生徒に対して、もう少し自然と触れ合うことが大切だと思いました。オーストラリアと日本での自然環境は違いますが、スマホなどの画面を長時間見るのではなく、外で体を動かすことを提案します。また、部活動というものは海外からするととてもめずらしく、羨ましく思われることから、日本では人間形成、成功や挫折を通じたメンタル強化、健康的な生活ができるなど、制度がしっかりしていることを知ることができました。そのため、これまで以上に自主的に積極的に部活動に参加することを提案します。

5　参考文献

●「オーストラリア」のペット事情　https://www.preciousone.co.jp

カウンセリングに対する意識の違いについて

杉並区立西宮中学校　第2学年　南　　芳　奈

1　研究テーマの設定の理由

日本では普段の生活の中でカウンセリングを活用している人をあまり見ないため、もっと活用してもらうにはどうすればよいのか、カウンセリングが盛んだといわれる海外と比較して調べたいと思ったことから、このテーマを設定しました。

2　事前調査

西宮中学校の第2学年でカウンセリングに対する意識調査を行いました。その結果、ほとんどの生徒が使ったことがないと答え、その理由には「他の人に相談したから」という意見の他に「カウンセリングを受けたら大ごとになりそう」など否定的な意見も出ました。

3　現地での調査

現地校の生徒17人に同じ内容のアンケートを取りました。結果、カウンセリングを使ったことのある生徒の割合に日本と大きな違いは見られませんでした。しかし、図1の結果から現地校では約70％の生徒がカウンセリングについてもっと増やすべきだとポジティブにとらえていることが分かります。また、「もっと秘密が守られるべきだ」「匿名性のものがあればもっと利用される」など、カウンセリングをより良いものにするための具体的な意見が多く出ました。

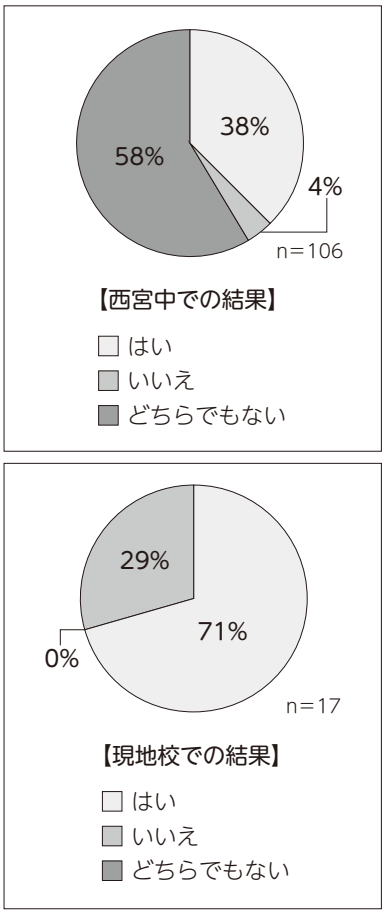


図1　これからもカウンセリングを増やすべきだと思いますか。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

今回の調査から、現状としてカウンセリングの普及は日本とオーストラリアであまり差はないけれど、オーストラリアの方が同じ年代でも、カウンセリングのことを重要だと考え、これからの在り方について具体的・客観的に考えられる生徒が多いことが分かりました。このことから、今後このような意見をもつ人がいるオーストラリアでは、もっとカウンセリングが盛んになると予想できます。

日本とオーストラリアの結果で共通していた点として、悩み事ができたら友達に相談する人が多いことが挙げられます。友達に相談する方が気楽な人が多いと思いますが、友達の判断が常に正しいとは限らないと思います。これまで自分の悩みが言えなかった人も、違う人に相談していた人も、悩みを打ち明ける一つの手段としてカウンセリングを活用してもらうために、日本の学生はもっとカウンセリングに興味をもち、自分事として意見を出してほしいと思います。

日本とオーストラリアの生活習慣の違い

杉並区立西宮中学校　第3学年　百　家　柚　季

1　研究テーマの設定の理由

私は今まで海外に行ったことがないので、考え方や価値観、生活習慣の違いを感じたり、体験したりすることがなかった。海外の人の生活習慣について知る機会といえばインターネットで動画を見たり、学校の授業で映像や、画像を見たりする時ぐらいだった。だから、今回のオーストラリアの派遣では自分の目で見て、実際に体験しながら生活習慣について日本と異なる点をたくさん見付け、学びにしたいと思い、このテーマを設定した。

2　事前調査

私は「日本の習慣といえば」をテーマに選択肢をいくつか作り、西宮中学校の3年B組28人にアンケートを実施したところ「礼儀や上下関係を大切にする」という選択肢を選んだ人が最も多かった。目上の人に対して敬語を使って過ごしたり、学校でも先輩に対して敬意をもって接したりしている様子が見られることからも日本は上下関係を大切にする習慣があると感じている人が多いのではないかと考えた。

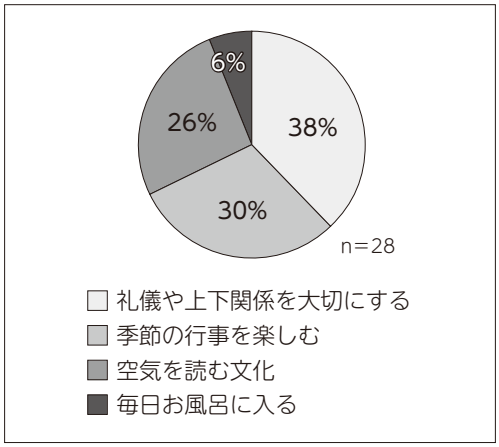


図1　日本の習慣といえば

3　現地での調査

現地では町の人々やホストファミリーへのインタビュー、現地校でのアンケートを通して調査をした。インタビュー、アンケートどちらとも「オーストラリアの人々の習慣」について回答してもらった。アンケートでは、オーストラリアの3つの習慣を挙げてもらうことと日本で行ったアンケートと同じ質問をし、選択肢の中から当てはまるものにチェックをつけてもらった。その結果「毎日お風呂に入る」、「意見を周りに合わせる」という意見が多く集まった。また、日本とオーストラリアどちらも「季節の行事を大切にする」という意見が挙げられた。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

アンケートを通して、私は驚いたことや新たな発見に出会うことができた。私は日本での調査をしていた時「オーストラリアの人々の方が自分の意見をもっていて、しっかりとその意見について発言をする」と予想していた。なぜなら、「海外の人は自分の意見をもっていて周りに合わせることはしない」というイメージをもっていたからだ。しかし、アンケート調査の結果は予想とは違い、たくさんの人が「意見を周りに合わせる」という意見を挙げていた。また、町や国全体で自然と共生するための対策や、動物や自然を守る取組をしていることを知った。私は自然を守るためには自然に歩み寄り、どうやったら共生できるのかを一番に考えることが大切だと感じた。これは人との関わり方にも関係していて、相手を「一人の人間」として見て歩み寄ることでお互いに交流を深められると考えた。

日本とオーストラリアのジェンダーの考え方について

海城中学校　第3学年　石　井　捷　斗

1　研究テーマの設定の理由

男子校に通う私は、日常的にジェンダー平等とは距離のある環境で生活しており、自分の中に偏見や無理解があるのではと感じている。そこで、ジェンダー平等が進んでいるとされるオーストラリアの人々と交流することで、自分の考えを見直し、異文化理解を深めたいと考えた。ホームステイや現地校での取材を通じて、ジェンダーに対する価値観の違いを体感し、自分自身の視野を広げることを目的としてこのテーマを設定した。

2　事前調査

世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数によると、日本は139カ国中118位、オーストラリアは13位と大きな差がある。私は自校で制服や家事に関するアンケートを実施し、男子中学生のジェンダー意識を調査した。制服の性差に違和感をもたない生徒が多かったが、ジェンダーニュートラル制服には賛成する意見が多く、選択の自由を支持する傾向が見られた。一方で、男子がスカートを履くことには違和感をもつ生徒が多数で、服装に関する固定観念は根強いことが分かった。家事については「どちらも担うべき」との回答が多く、平等意識が高いことが示された。

3　現地での調査

オーストラリアの現地校でも同様のアンケートを実施したところ、制服の性差に問題を感じないという回答が多く、ジェンダーニュートラル制服には全員が反対した。これは「ジェンダーニュートラル」という言葉の認知度の低さが影響している可能性がある。男子のスカート着用に違和感がないと答えた生徒もおり、無意識のうちに平等意識が根付いていると感じた。家事に関しては全員が「どちらも担うべき」と回答し、街頭調査でも同様の傾向が見られた。日本と比べて、家庭内でのジェンダー平等がより自然に受け入れられている印象を受けた。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

今回の調査を通じて、日本では教育面でジェンダー意識が高まりつつある一方で、家庭面ではオーストラリアの方が平等が実現されている可能性があると感じた。男子中学生は制服の性差には従いつつも、選択の自由や多様性の尊重には前向きな姿勢を見せていた。オーストラリアでは、ジェンダーに関する言葉の認知度は低いものの、実生活では自然と平等が根付いている様子が見られた。今回は学校と家庭に限定した調査だったが、仕事の場面を含めたらどのような結果になるのか、今後の課題として考えていきたい。

5　参考文献

●「世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数」
https://reports.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2025.pdf　最終閲覧日10/6/2025

幸せな人生と教育

新渡戸文化中学校・高等学校　第2学年　阪　口　弓　太

1　研究テーマの設定の理由

日本とオーストラリアの学生は学校の授業を受けていて満足しているのか、また授業を受けて自身の幸せにつながると思っているのか知りたかったのでこのテーマを設定しました。そして自分の中の人生の幸せについて考えたいと思いました。

2　事前調査

新渡戸文化中学校・高等学校の2年生に学校の授業は満足か、そして将来幸せになれるかの二つのアンケートを取りました。その結果ほとんどの人が学校に不満をもっておらず、今の授業を受けていれば、将来幸せになれると答えていました(図1・図2)。

一方、否定的な回答をした生徒からは、「学校授業では自分の好きなことをやっているわけではないので幸せにはなれない」「自習の時間を増やしてほしい」「授業が効率的ではない」という意見などが挙がりました。

3　現地での調査

現地調査では、日本の学校への質問と同じ質問をして答えてもらいました。アンケートは10年生に答えてもらいました。日本に比べて満足していない人が多いけれども、幸せになれると思っている人がほとんどなので、学校の授業の満足度が幸せに直結しているわけではないことが分かりました(図3・図4)。学校の授業に満足していないと回答した生徒の意見には、「学校の授業だけでは物足りないので、もっと多くのことを学習したい」という意見がありました。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

事前調査と現地調査の違いを比べた結果、日本の生徒は授業への不満は比較的少なかったです(図1・図3)。対してオーストラリアの生徒は、「もっといろんな体験をしてたくさん学びたい」という意見が多かったです。つまり日本の生徒たちは学習に対して楽観的で、オーストラリアの生徒たちは学習に対して前向きということです。これらの不満の質には大きな差がありますが、今の学校の授業を受けて幸せになれるかという質問にはどちらも同じような回答結果でした。

そこで僕からの提案です。オーストラリアの学校は自分で受ける教科を選択して授業をするという選択式の授業なのですが、その授業を受けている人たちみんながとても幸せそうでした。実際に現地校の体験授業を受けてみて、オーストラリアの生徒たちは授業が始まったら集中して自分の作業や学習を進める姿が多く見られました。この授業では自分がやりたい授業や苦手を克服したい授業、楽しい授業を学年関係なく受けることができます。だから、日本でも選択式の授業が受けられる学校を増やしてみることで、幸せな人が増えるのではないかなと思いました。

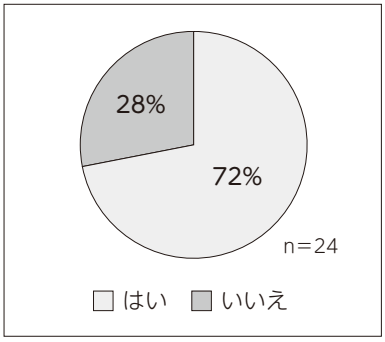


図1　学校の授業に満足しているか
(新渡戸文化中学校・高等学校)

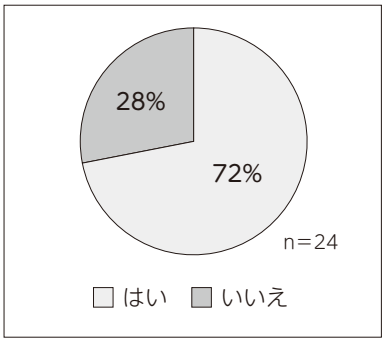


図2　学校の授業で将来幸せになれると思うか
(新渡戸文化中学校・高等学校)

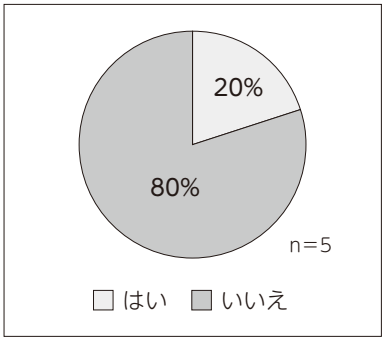


図3　学校の授業に満足しているか
(現地校)

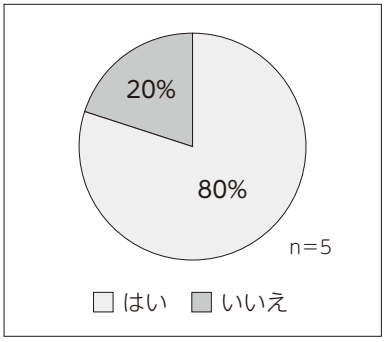


図4　学校の授業で将来幸せになれると思うか(現地校)

多文化共生

三田国際科学学園中学校　第2学年　**奈　良　朔　斗**

1　研究テーマの設定の理由

世界中で移民の問題があり日本でも関心が高まっています。僕の学校ではインターナショナルクラスがあり、外国がルーツの友人がいることが当たり前の環境で過ごしてきました。しかし、ニュースなどで移民の問題に触れ、多文化共生について考えるようになり、研究テーマとしました。

2　事前調査

三田国際科学学園中学校の第2学年で多文化共生に関する意識調査を行いました。観光目的の外国人に対しては、「街に活気が出る」労働目的の外国人に対しては、「人手不足の業種で大きな役割を果たしてくれている」などといった肯定的な意見が多い一方で、「ルールは守ってほしい」といった不安を感じる声もありました(図1)（図2)。

また、多文化共生を進めるには、ルールを分かりやすく伝える工夫や、日本人側の受け入れの姿勢、教育現場での国際理解の継続が必要だという意見が出ました(図3)。

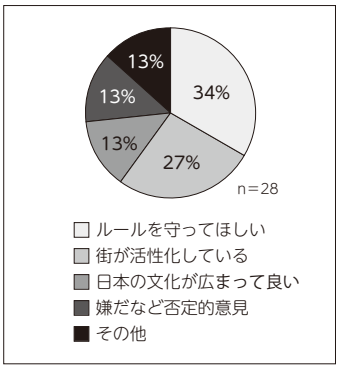


図1　観光目的の外国人に対して

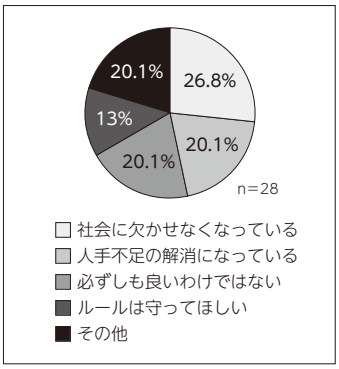


図2　労働目的の外国人に対して

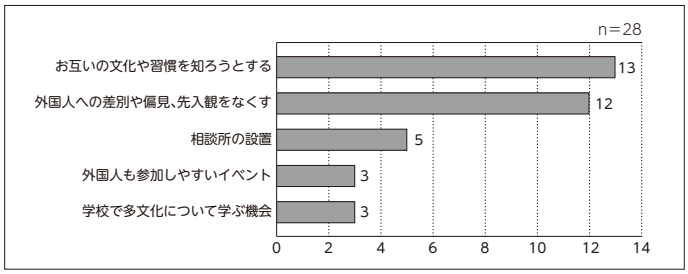


図3　多文化共生には何が必要だと思いますか。
（特に重要だと思うものを2つまで選んでください。）

3　現地での調査

現地の学校では、日本が多文化共生を実現するにあたって必要なことや課題を聞きました。「相互理解」や、「文化の違いを理解し合い柔軟な思考をもって対応をすることが大切だ」、「日本では外国人と関わる機会が少ないことが課題だ」という意見が多く挙げられました。

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

これらの調査の結果、僕たちの世代は多様な文化への理解が進んでいますが、外国人にルールが十分伝わっていないことに対する不安をもつことが多くなっています。また、多文化共生を実現するためには、相互理解や偏見をもたないこと、外国人と関わる機会をもつことが重要だと分かりました。しかし、実際には交流の機会が少なく、外国語を話すことへの不安や緊張から外国人との関わりをためらってしまうことが課題となっていると考えます。そこで僕たちの世代が気軽にできることを考えました。

一つは、学校に勤めている外国人の先生に積極的に話しかけてコミュニケーションを取ることです。その理由は、先生の出身国の文化や考え方について知ることができ、外国人と話す恐怖心も無くなっていくと思うからです。実際に、僕も外国人の先生達と話すことで、以前より外国人に話しかけやすくなりました。

他には、地域で行われている他国に関するイベントなどに行って、外国人と実際に触れ合う機会をもつことや、留学経験者の話を聞いたりYouTubeを視聴し、外国人の考え方や生活を知ることで、先入観や思い込みをなくしていけると思います。

結論として、多文化共生を実現するためには、お互いの違いを認め合い、尊重し合う姿勢をもつことが何より大切だと考えました。

今後も、他国の取組を学びながら、日本の現状と比較して考え、多文化共生について学び続けていきたいと思います。

オーストラリア特有の動物生態と動物保護活動

共立女子中学高等学校　第3学年　星　野　咲　空

1　研究テーマの設定の理由

私がこの研究テーマにした理由は、以前家族とオーストラリアの動物園でコアラやカンガルーと触れ合ったときに可愛いと感じ、オーストラリア特有の動物の生態について詳しく調べたいと思ったからです。また、その動物園内に野生の動物保護を行っている施設があり、興味をもったからです。

2　事前調査

クラスメイト10人に動物保護活動について聞きました。その結果は図1のようになりました。聞いたことがある人が過半数以上をしめていたものの、興味がある人は1人もいませんでした。このことから、私は今回のホームステイを通して動物保護活動の大切さをみんなに広めていきたいと思いました。

そしてWEBの調査によると、オーストラリア大陸の動物の固有種が占める割合は9.1%にものぼることが分かりました。こうした状況に対応すべく、オーストラリア政府は保護と種の保存のため様々な政策に乗り出しています。蛇やワニ、海洋生物など多くの動物を保護しています。保護対象となる動物は、オーストラリア大陸ならではの固有種だそうです[1]。

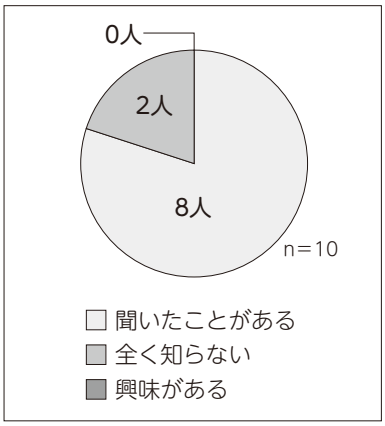


図1　クラスメイトに聞いた動物保護活動について知っているか

3　現地での調査

シドニーの町で出会った4人にオーストラリアの動物保護活動について知っているかインタビューを行いました。4人ともオーストラリアでの動物保護活動は有名であると答えてくれました。

ウィロビーの学校の生徒にも同じことを聞きました。図2はその結果を表したものです。3分の2の生徒が動物保護活動について知っていると回答してくれました。

また、興味があると答えてくれた生徒にどのような活動を行っているのか詳しく聞いたところ、絶滅の危機であるコアラ、カメなどを保護している、動物園や国立公園では動物を保護するための活動を積極的に行っていると教えてくれました。

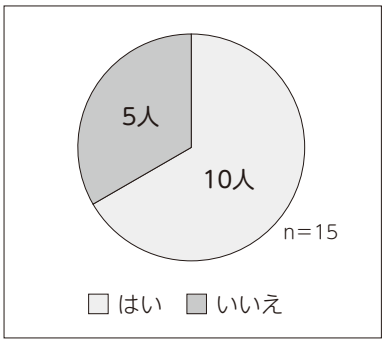


図2　ウィロビーの生徒に聞いた動物保護活動について知っているか

4　調査の結果・調査から分かった事・私からの提案

事前に日本で行っていたアンケート調査とオーストラリアで行った調査の結果を比べると、結果に大きく差があることが読み取れます。日本では動物保護活動に興味をもっている人が少なく、積極的に活動を行っていません。私もオーストラリアに行く前までは動物保護についてそこまで興味をもっていませんでした。しかし、オーストラリアに行ったときに街中など身近な場所にさまざまな種類の鳥がいたり、ホストファミリーと動物園に行ったときに日本ではあまり見られないような動物を多く見たりすることができて、オーストラリアは野生動物との距離が近いと感じました。日本では日常生活で動物を見ることが少なく、野生動物との距離も近くありません。その違いが、日本では動物保護活動が盛んではない一番の理由であると考えました。また、動物保護活動が少ないと絶滅危惧種が増えていくことにもつながっていきます。まず私たちは野生動物、動物保護活動に少しずつ興味と関心をもつことが大事であり、それが今後の日本の未来にもつながっていくのではないかと思いました。

5　参考文献

●(1)　エコナビの「保護の対象となる野生動物は?」
https://econavi.eic.or.jp/ecorepo/together/214(2012年5月)

Ⅲ　留学の思い出

****

オーストラリアで経験したこと

杉並区立阿佐ヶ谷中学校　第2学年　**細　野　耕　生**

僕は英語が少ししか話せなかったので、ホストファミリーや現地校のバディと上手くコミュニケーションが取れるか不安でした。しかし、いざ行ってみると、僕が上手く話せなくても皆が聞き取ろうとしてくれました。また僕もだんだん英語に慣れてきたので、コミュニケーションを取れるようになりました。例えば、ホームステイ最初の休日にホストファミリーと外出したときに聞いた英語はほとんど分かりませんでしたが、ホストファミリーと過ごす最後の日には自分からも話しかけることができるようになりました。

他にも、互いの言語が分からなくてもスポーツならば一緒に楽しめることが分かりました。現地校の休み時間にバディと卓球をしました。お互いの言語を理解していなくてもバディと楽しみ仲良くなれました。海外でその国の言語をよく理解していなくても、スポーツなどを通じてコミュニケーションが取れることをこの留学を通して学びました。

オーストラリアで現地の人たちと一緒にテニスをしてみたいと思い、日本からラケットを持って行きましたが、天気が悪い日が続き、残念ながらできませんでした。将来、再チャレンジしたいと思います！その時までに英語のスキルアップを目指してがんばります。

****

オーストラリアでの体育の授業

杉並区立東田中学校　第2学年　**工　藤　珠　里**

私は帰国してから「オーストラリアで何が楽しかった?」と聞かれると、学校が一番楽しかったと答えます。学校の授業の中でも特に体育の授業が日本と異なるところが多く、とても印象に残りました。

成績や自分の課題を一番に意識しながら行う日本の体育に対し、オーストラリアの体育ではとにかく全力で楽しむことを最重視しているように感じました。ほとんどの人が積極的に楽しんでいて、私が今まで経験した体育の授業では見たことのない光景でとても驚き、感動しました。オーストラリアの授業で、私の苦手なバスケットボールをやったときに、話したことがなかった子やチームメイトとコミュニケーションが自然に取れて、とても楽しいと感じました。新しい経験で、視野が広がったように感じます。

****

オーストラリアでの貴重な体験

杉並区立東田中学校　第2学年　**小　巻　優　梨**

オーストラリア留学に10日間行きました。海外に一人で行くことを今まで体験したことがなかったため、最初は楽しみな気持ちよりも不安な気持ちのほうが大きかったです。しかし、現地に着いて

ホストファミリーと話をしたり一緒に料理をしたりすることによって、来てよかったと感じることができました。そんなホストファミリーとの一番の思い出は、一緒にクルーザーに乗ったことです。その日は海を訪れ、いろいろなことを教えてくれました。日本ではあまり使う機会がなかった英語にもだんだんと慣れ、留学終盤にはしっかりとした会話をすることができるようになってました。私は将来オーストラリアをまた訪れたいと思います。この10日間は大切な思い出になりました。

****

オーストラリアで学んだ教育環境の違いと自己成長

杉並区立松溪中学校　第2学年　**大　島　凛　音**

今年の夏、私はオーストラリアに行き、ホームステイや現地校での体験、個人研究を通して多くの発見を得ました。現地校では、ブーメランを製作するなど、アボリジナルの歴史を学び、オーストラリアの文化や生活について知ることができ、貴重な体験になりました。ホームステイでは、英語での生活で戸惑うこともありましたが、ホストファミリーも理解しようとしてくれて、自分の英語が伝わり、自信をもつことができました。言葉が通じなくても伝えようとする気持ちの大切さを学びました。留学前は失敗を恐れていましたが、今は挑戦することの大切さを実感しています。この経験を通じて、自分の視野が広がり、今後はもっと積極的に学びに向き合いたいと思いました。

****

オーストラリアで学んだこと

杉並区立天沼中学校　第2学年　**神　山　未柚子**

ホームステイでは、温かいホストファミリーに迎えられ、不安だった気持ちがすぐに和らぎました。現地校では、バディが親切にサポートしてくれて、言葉の壁を感じながらも授業や交流を楽しめました。自分の意見を伝えたり、コミュニケーションをしたりすることの難しさを実感できた貴重な体験となり、異文化の中で新しい価値観に触れたことは、私にとって大きな学びです。この貴重な経験を通して、英語力だけでなく、もっと広い世界で挑戦していきたいという意欲がわきました。

****

オーストラリアで得たものとこれから

杉並区立天沼中学校　第2学年　**渡　邉　梅　花**

オーストラリアの10日間の留学では、ホストファミリーと過ごしながら現地の中学校でバディと一緒に授業を受けたり、一緒に昼食を食べたりしました。英語で自分の気持ちを伝えるのはとても難しかったですが、優しいホストファミリーや友達のおかげで少しずつ慣れ、楽しむことができました。日本とは違った生活習慣や学校生活に触れ、自分の視野を広げ、他の国にも興味をもつことができました。今回のこの貴重な経験を生かして、もっと英語を上達させ、これからはいろいろな国についての知識を深めていきたいです。

****

夢に近づく第一歩

杉並区立東原中学校　第2学年　**五十嵐　高　澄**

今回のオーストラリアの留学は、僕が海外に出るきっかけになりました。最初は「怖いな」「不安だな」と思っていました。しかし、実際に行ってみると不安に思う暇もないほど、充実した日々を過ごすことができました。海外のショッピングモールや教会に行きました。日本では体験できないことが沢山体験できました。日本での常識が海外では通じないこと、文化の違い、何よりも食文化の違いを体全身で実感しました。僕の夢は通訳になることです。今回の留学で自分の英語がどれだけ未熟なのかも実感しました。これをきっかけに、さらに英語の勉強に励んでいきたいです。

****

ウィロビーがくれた一生の思い出

杉並区立中瀬中学校　第2学年　**松　岡　あさひ**

ウィロビーに行けると分かった瞬間、私は嬉しさと期待で胸がいっぱいになった。実際、オーストラリアで過ごした10日間は、本当に素晴らしい時間だった。ホストファミリーは温かく接してくれて、7日間のホームステイは終わってみれば一瞬だった。ホームステイ中は、植物園に行ったり、カードゲームをしたりして、毎日が本当に楽しかった。現地校体験では大変なこともあったが、バディの親切なサポートや一緒に来た友達のおかげで、毎日わくわくして過ごすことができた。フェアウェルパーティでスピーチをしたとき、私の拙い英語でも、友達が目を潤ませながら真剣に聞いてくれて、私も寂しくなったが、すごく嬉しかった。現地校の友達やホストファミリーと過ごした時間は、私にとって一生の思い出だ。私は、人々の心が広くて、穏やかで温かい雰囲気のオーストラリアが大好きだ。私は、いつかまたオーストラリアを訪れたい。

****

ホストファミリーとの生活

杉並区立井草中学校　第2学年　**山　本　光　音**

私はホームステイ中、毎日たくさんの発見・思い出を作ることができました。

私は今回の留学が初めての海外だったので、初めての海外で外国の方とうまく生活できるかとても心配でした。しかし、迎えに来てくれたホストファザーはとてもニコニコ笑っていて、優しく話しかけてくれました。休日にはリクエストしたオーストラリア博物館に連れて行ってくれたり、ホストマザーの兄弟の誕生日パーティーに行ったりしました。どれもとても貴重な経験になりました。他にもみんなで一緒に映画を見たり、夕飯を作ったりと普段の生活もとても楽しく感じられました。自分たちと話しているだけでは気付けませんでしたが、ホストファミリー同士で会話しているのを聞いたときに自分たちと話すときよりもスピードが速いことに気が付きました。難しい単語が出てきたときには私たちにも分かる単語に言い換えて説明してくれました。その気遣い一つ一つが私の心を温めてくれました。

私はホームステイを通して、言語だけでなく文化や価値観の違いについても深く学ぶことができました。この経験は、私にとって一生の宝物です。

****

オーストラリアで感じた学びと夢

杉並区立宮前中学校　第2学年　**木　村　太　洋**

オーストラリアでのホームステイは、僕にとってとても貴重な経験になりました。現地の人と触れ合いながら、英語で生活する楽しさや難しさを実感しました。文化の違いに驚くこともありましたがそれ以上に学ぶことが多く、自分の視野が広がりました。この経験を通じて、将来は海外に住んでもっと深く異文化に触れて、現地の人と関わりながら生活したいという思いが強くなりました。その夢をかなえるためにこれからも英語の勉強を続けて、この経験を大切にしたいです。

****

バディと過ごした日々

杉並区立富士見丘中学校　第2学年　**山　口　琴　音**

私がオーストラリアで特に印象に残ったことは、現地校体験です。英語が苦手な私にとって、話が通じるかとても心配でした。でもバディや一緒にお昼ご飯を食べた友達はとてもやさしくて、丁寧に私の話を聞いてくれました。おかげで少しずつ自分からでも英語で話せるようになりました。バディとの時間は、私にとって本当にかけがえのない大切な思い出です。

みんなで一緒にお昼ご飯を食べたり、校庭で鳥に餌をあげたりしたこともとても楽しかったです。言葉が完全には通じなくても、一緒に笑ったり、遊んだりすることで自然と仲良くなることができました。そして、別れの日にはバディが泣いてしまい、私もとても悲しい気持ちになりました。短い時間だったけれど、心と心がつながっていたのだと感じました。

英語が話せなくても、「仲良くなりたい」という気持ちがあれば、言葉の壁は越えられることを学びました。この経験を通して、今後も外国の人と関わりたいと思いました。

****

現地校の雰囲気

杉並区立高井戸中学校　第2学年　**赤　井　琉　果**

僕はオーストラリアの現地校に行く前、日本の学校とあまり変わらないだろうなと思っていました。しかし、僕が実際に行ったEpping Boys High Schoolは日本と全く違いました。

例えば、授業を自分たちでとる制度です。日本では大学で必修科目などがあり、それ以外は好きな授業を受けますが、オーストラリアではそれが中学生の頃から行われていました。その他に、規模や雰囲気、生徒の人柄も違いました。規模に関してはバスケコートが野外に6面ほど張れる広さや、50を超える教室の数など、すべてが日本と違いました。雰囲気、生徒の人柄については、ほとんどの人がフレンドリーで、ネームタグを首にかけていると名前を呼んでくれたり、バスケに誘ってくれたり、おかしをくれたりしました。また、生徒はみんな休み時間に何かしら食べていて、日本ではできないことだなと少しうらやましく思いました。

以上の3点から日本とオーストラリアの学校は違っていて、オーストラリアの学校はとても自由で楽しく感じました。

****

学びとこれから

杉並区立高井戸中学校　第2学年　**岩　田　　謡**

今回の留学事業は僕にとって初めての海外でした。両親ともに海外に何度か行ったことがあり、どんなものなのかずっと気になっていました。初めての海外には、何を持っていくといいのか、お店でのあいさつや会話、文法などについて日本にいるときにたくさん調べてから今回の留学に臨みました。でも、実際に話すのはとても難しかったです。英語がうまく伝わらなかったり、聞き取れなかったりと苦労しました。でも、一緒に行った友達が助けてくれたり、相手の人が言い方を変えて簡単な単語にして話してくれたりして、拙くてもたくさん会話することができました。また、海外で実際に生活していると、同じ英語を使う国でも英語の文化は全然違うんだなと思いました。例えば、ウィロビーの市役所に伺ったときに、市議会議員の方から「グッダイ」と言われて、そのときは意味が分からなくてとりあえず「You too」と返しました。そのことをさっぱり忘れて日本で生活していたら、ある日海外のこんにちはを表すフレーズ集という動画を見て、その動画の中でオーストラリアのスラングで、あいさつの意味があるGood day の省略形のG’dayであるということを知りました。この時はとてもびっくりして、日本と海外のつながりを感じました。また、人によって発音やなまりが全然違うなと感じました。特に僕がホームステイさせてもらった家の方はインドネシアの方で、インドネシア語に近い発音だなと話しているときに思いました。また、街頭インタビューをしているときや、現地校の生徒たちと会話をしているときにも皆同じ単語でも発音が少し違うことに気付きました。今回の留学を通して、実際に英語を使って話すのは簡単なことではないんだなと感じました。でも、英語が話せるというだけで今までの何十倍の人ともコミュニケーションが取れるようになるなら英語の勉強はコスパ最強だと強く感じました。もっとたくさん英語の勉強をして、また絶対に海外に行きたいです。

****

オーストラリアでの経験

杉並区立向陽中学校　第3学年　**前　澤　理　公**

オーストラリアでの2週間のホームステイはとても温かい思い出になりました。陽気なおばあちゃんと人懐っこい犬に迎えられ、毎日が楽しく、安心できる時間でした。特にビーチへ連れて行ってもらったことが印象的で、青い海と広い空に心が解放されました。さらに、過去に滞在していた多国籍の生徒たちが毎日のように遊びにきており、一緒に交流できたことも貴重な体験でした。異文化に触れ、たくさんの人と出会えたことを大切にしたいです。今後はこの経験を生かして積極的に英語を学び、世界の人々とつながりながら、将来を考えていきたいです。

****

オーストラリアで学んだこと

杉並区立向陽中学校　第2学年　**吉　澤　　葵**

僕はオーストラリアに行って大切なことを学びました。それは、英語が話せなくても怖がらずに話しかけてみることです。

自分は渡航して数日はあまり英語が話せないからと自分から人に話しかけに行かないことが多かったです。でも、それは人と仲良くなるチャンスを逃しているのだと気付けました。もし自分が分からない言葉があったり、単語が間違っていたりしても、ほとんどの人は僕が何を言おうとしているかを理解しようとしてくれました。

言葉は分からなくても、物事は伝わることを学び、僕は積極的に人に話しかけてみようと思いました。

****

実際に行ってみたからこそ

杉並区立泉南中学校　第2学年　**大　矢　沙　和**

私はオーストラリアに行く前に文化や生活の違いなどについてインターネットで調べ、準備をしていました。しかし、実際に現地に行って生活をしてみると事前に調べていたこととは異なる点も多く「自分の目で見て、体感すること」の大切さを知りました。例えばオーストラリアでは「Thank you.」に対して「You're welcome.」と返すのではなく、「No problem.」と返すなど気軽でフレンドリーだなと感じました。ホストファミリーなど現地の人々との交流を通して、表情やジェスチャーで気持ちが伝わることもあり、言語が違っていても思いは伝わるのだなと思いました。このことが自分の中で自信となり、もっと現地の人と話したい、たくさん交流をしたいという思いが強くなっていきました。調べるだけでは分からないことも、実際に現地へ行くことで新たな学びや発見があるということに気が付きました。今回、オーストラリアへ行ったからこそ得られた大切な学びだと思います。

****

オーストラリアで感じたこと

杉並区立西宮中学校　第2学年　**南　　芳　奈**

私は今回の派遣を通して特に驚いたことがあります。それは、現地の人々は周りの人のことをとても大切にすることです。例えば私のホストファミリーには子どもが二人いますが、二人とも成人していてその家には住んでいませんでした。しかし、ほとんど毎週親の家に帰ってきて一緒に夕食を食べているそうです。私の家もそうであるように、日本では成人したら長期休暇のときや年末年始、お盆の頃等に実家に帰るのが普通だと思っていたので、家族との時間を楽しむ暮らし方は、現地ならではのものであると感じました。また、車で出かけていて信号を待っていたとき、隣にとまっていた車に乗っていた人がたまたまホストファミリーの知り合いだったということがありました。そのとき、ホストファミリーは窓越しにその人と信号が変わるまで会話をしていたのです。東京で暮らしていて普段そんなことはほとんどないため、地域のコミュニティを大切にする現地の生活が衝撃でした。私はこれから、家族や友達、そして今まであまり関わってこなかった地域の方々とのつながりをもっと大切にするように心がけたいと思います。

****

「多様性」と言う前に

杉並区立西宮中学校　第3学年　**百　家　柚　季**

私はオーストラリアを実際に訪れてみて「互いの文化を認め合い、共存している国」だと感じた。オーストラリアには色々な国の人が住んでいて、異なる文化が共存している。私がこのことを一番感じた場所はウィロビーの現地校だ。現地校にはアジア、オーストラリア、ヨーロッパなど異なる国にルーツをもった生徒が多くいた。そこには問題になりがちな「人種差別」の壁はなく、互いを当たり前のように受け入れていた。私自身も仲良くなった子に「日本語でこれはなんていうの」と質問をされ、日本語を教えた機会があり、話すのがとても楽しかった。この経験を通して、私は今回の派遣事業で「多様性」について考えることができた。現在、「多様性」という言葉は日常で聞く機会が多い。しかし「多様性」と言う前に「一人の人間」として見ることが大切であり、無自覚の差別にならないよう、相手を

怖がらず話してみることが互いに歩み寄るためには必要なことではないかと考えた。

****

人と関わることの面白さ

海城中学校　第3学年　**石　井　捷　斗**

今回のオーストラリア留学は、私にとって初めての海外旅行でした。言葉も文化も異なる国で一週間を過ごすことに、出発前は緊張と不安でいっぱいでした。英語が通じるか、現地の人とうまく関われるか、そんな心配ばかりが頭をよぎっていました。

しかし、実際に現地に到着してからは、少しずつ気持ちが変わっていきました。特に印象に残っているのは、オーストラリアならではのワイルドなハンバーガー屋さんを訪れたことです。ボリューム満点で個性的なメニューに驚きながらも、友達と笑い合いながら食事を楽しむうちに、自然と緊張がほぐれていきました。異文化に触れることの楽しさを、肌で実感できた瞬間でした。

そして何よりも心に残っているのは、ホストファミリーと一緒に夕食を作った時間です。言葉の壁はありましたが、料理を通して気持ちが通じ合う感覚があり、とても温かいひとときでした。特にペパロニを一緒に作ったことは、今でも鮮明に思い出せるほど楽しい思い出です。笑顔と香ばしい香りがキッチンに広がっていたあの瞬間は、私にとって宝物のような時間でした。

また、オーストラリアで印象的だったのは、ワークライフバランスの良さです。朝食は両親が交代で作り、夕食は母が料理、父が洗い物を担当するなど、家事を自然に分担していました。仕事もリモート会議が定着しており、出社は週に2回程度。家族の予定が重ならないように調整されていて、家庭と仕事の両立がうまく取れていると感じました。

この一週間の留学を通して、異文化に触れることの面白さや、人とのつながりの大切さを改めて実感しました。不安だった気持ちは、たくさんの出会いや経験によって、感謝と喜びへと変わっていきました。この経験を胸に、これからも新しいことに挑戦していきたいと思います。

****

オーストラリアの思い出

新渡戸文化中学校・高等学校　第2学年　**阪　口　弓　太**

僕はこの派遣を通して、日本では体験できないような面白い体験を山ほどしました。

特に印象に残っていることは三つあります。一つは道路です。日本は複雑で分かりづらい道路がたくさんあります。しかし、オーストラリアでは単純な道が多く、常に上がったり下がったりしていて面白かったです。食事や文化だけではなく、道さえも日本と違って驚きました。

また、学校も違いました。僕たちが通ったエッピング・ボーイズ・ハイスクールという学校は、日本の学校とは比べ物にならないくらい大きくて、授業も自分で選択できるというとても面白い学校でした。

最後に、ホストマザーとの生活です。ホストマザーにはとても優しく接してもらい、常に僕たちのことを考えて行動してくれました。そのような優しいホストマザーと一緒に過ごした毎日は、僕にとって大切な思い出になりました。ホストマザーが10年間オーストラリアに住み正式な市民として資格を得たため、そのセレモニーに参加できたこともとても貴重な経験になりました。

僕は、このオーストラリアで学んだことを生かして、日本で色々なことを学んでいきたいです。

****

オーストラリアで感じたこと

三田国際科学学園中学校　第2学年　**奈　良　朔　斗**

僕はこのオーストラリア留学を通して、英語を学習する意欲がとても高まりました。初めは英語を話すことはとても緊張しましたが、ホストファミリーも現地校の学生も僕の未熟な英語を聞き取ろうと優しく接してくれました。 ホストファミリーの親戚が来て一緒に食事をした時には、その親戚が中国から留学で来ていたので、お互いに英語を勉強している者同士とても仲良くなりました。日本のネットミームの音源が流れたことをきっかけに話し始め、英語を起点にお互いの言語を学んだり、興味があることや普段の生活のことを話すことができ、英語学習のモチベーションが上がりました。

また、ホストファミリーが正式な市民の資格を得たため、市庁舎でシティズンシップセレモニーがあり、一緒に参加させてもらいました。移民としてオーストラリアに来て、オーストラリア国民として受け入れられる場に立ち会うという貴重な体験ができました。その日、オーストラリア国民になった人の国の数が30以上あったことや、学校でも様々な国がルーツの学生がいたことから、オーストラリアは多文化共生が実現されている国だと改めて実感しました。

****

初めての挑戦

共立女子中学高等学校　第3学年　**星　野　咲　空**

今回の海外研修は、私にとって今までの人生で一番の挑戦と言えるくらい大きな経験でした。私は小学生の頃から留学をして英語を学びたいと決めていたので、オーストラリアへ行くことは自分で決めました。オーストラリアに到着したときは行く前の楽しみとは違い、不安と寂しさでいっぱいでしたが、そんな私が安心して楽しく過ごせた一番の理由は、ホストファミリーだと思います。私は英語を聞き取ることが苦手で、しっかり会話ができるか緊張していたけど、ホストファミリーがやさしく、ゆっくりと話してくれて、何日か経つと普通のスピードの英語でも聞き取れるようになりました。休日には動物園に連れて行ってくれて、コアラやカンガルー、他にもたくさんの動物を見ることができました。なんと、動物園を回りきるのに4時間もかかりました。それぐらい大きくて立派な動物園でした。朝食や夕食は毎日違うメニューを食べさせてくれました。朝食にベジマイトを出してくれましたが、私の口には合わなかったです。ホストファミリーと過ごす最後の夜、手紙に感謝の気持ちを英語で書きました。とても喜んでくれてうれしかったです。

今回の海外研修を通して、普段の学校で英語の授業を受けているだけでは海外に行ったときに生活するのは難しいことが分かりました。実際に話して、聞き取って、体験することで英語の知識が身に付いたと思います。この経験を無駄にはせず、また海外に行って、将来はもっと英語を勉強をしていきたいと思いました。

■中学生海外留学事業は『杉並区次世代育成基金』を活用しています

『次世代育成基金』とは、次代を担う子どもたちが、自然・文化・スポーツなど様々な分野における体験・交流事業への参加を通して、視野を広げ、将来の夢に向かって健やかに成長できるように支援するための杉並区独自の仕組みです。

平成24年の創設より、寄附者の皆さまからの継続的なご支援をいただくことで、多くの子どもたちに貴重な体験を提供することができています。寄附者の思いが基金を通じて子どもに託され、その子どもたちが大人になり、さらに次の世代を育んでいく。この「支援の循環」が杉並に根付き、希望に満ち溢れた未来へとつながるよう、ご支援をお願いいたします。

次世代育成基金への寄附・問合せ先

杉並区子ども家庭部　児童青少年課　青少年係

〒167-0051　杉並区荻窪1-56-3

TEL.03-3393-4760

FAX.03-3393-4714

令和7年度
杉並区中学生海外留学（第13期）成果報告書

令和7年12月発行

登録印刷物番号
07ー0061

編集・発行　**杉並区立済美教育センター**

〒166-0013　杉並区堀ノ内2-5-26

TEL.03-6379-3521

★杉並区のホームページでご覧になれます。

https://www.city.suginami.tokyo.jp/s114/8470.html

WILLOUGHBY CITY
SUGINAMI CITY